

Discussion Paper Series

University of Tokyo
Institute of Social Science
Panel Survey

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
ディスカッションペーパーシリーズ

20～40 歳の成人男女における
健康保持・ストレス対処能力 sense of coherence
の形成・規定にかかわる思春期及び成人期の
社会的要因に関する研究

Social determinants and developmental factors of
sense of coherence in 20 to 40 years old population

戸ヶ里泰典

(東京大学大学院医学系研究科／日本学術振興会)

Taisuke TOGARI

January 2008

No.5

20～40歳の成人男女における健康保持・ストレス対処能力 sense of coherence の 形成・規定にかかわる思春期及び成人期の社会的要因に関する研究

戸ヶ里泰典（東京大学大学院医学系研究科／日本学術振興会）

【要旨】

医療社会学者 Antonovsky により提唱された健康保持・ストレス対処能力概念である sense of coherence(SOC)概念にインパクトを及ぼすとする SOC の形成仮説に基づき、思春期における社会経済的環境、学業上の成功および成人期の学歴や雇用形態も加味した職業を中心とする社会経済的地位、および配偶関係やサポートネットワークを中心とする社会関係より、SOC の形成に関するモデルを探索することを目的とした。データは、社会科学研究所の若年・壮年パネル調査の第一時点のものを使用した。

まず、思春期における家庭の経済状況、中学3年時の学業成績は、直接 SOC との関連性を持っていた。また、父親の職業、主観的経済状況は、学業成績、学歴を介して間接的に影響していた。他方で学歴は基本的には職業、現在の経済状況を介して SOC に影響する間接的な関連性のみを有していた。第二に、職業と SOC の関係について、非正規雇用のブルーカラー職であることは、世代によらず、また、思春期の社会経済的な状況、学歴によらず低い SOC を規定しており、現在の経済状況を介した間接的な関連性を持っていた。また、25～34歳の世代においては、非正規雇用のホワイトカラー職であることが低い SOC を規定しており、それは直接の関連性と現在の経済状況を介する間接的な関連性の両者が見られていた。第三に、サポートネットワークに関しては、世代によらず人間関係における相談相手の範囲が少ないほど低い SOC であるが、20～24歳の世代では仕事や勉強の相談相手の範囲と SOC とは関連が見られないが、それ以降の世代では範囲が狭いほど低い SOC となっていた。

以上より Antonovsky による SOC の形成に関する理論を概ね支持することができ、健康生成モデルが健康の階層間格差・不平等発生のメカニズムを説明しうる1つの理論として位置づけることができるものと考えられた。

【謝辞】

本研究は、東京大学社会科学研究所若年・壮年パネル調査（文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 S：奨学寄付金株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）の第一時点データをもとに実施した。また本研究実施に関しては、石田浩先生、佐藤香先生、三輪哲先生、中澤渉先生、山本耕資先生はじめ東京大学社会科学研究所若年・壮年パネル調査企画委員・実施委員の諸先生方の多大なるご助言を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

1. はじめに

Antonovsky により提唱された sense of coherence(SOC)概念とは、慢性ストレス、進学、就職、結婚、出産といったライフイベント、戦争などのトラウマティックなイベントも含めた生活、人生上の出来事や逆境を経験する際に、そのストレスを成功的に対処し、健康の維持増進を図るストレス対処能力あるいは健康保持能力として理解することができる(Antonovsky 1979 pp160-181; Antonovsky 1987 pp149-175)。SOC はコヒアレンス感(小田 2000)あるいは首尾一貫感覚(山崎 1999)という日本語に訳されており、世界は首尾一貫したものつまり、把握可能であり、処理可能であり、意味のあるものである、といういわば世界観に近い概念であり、人生への志向性であると提唱者の Antonovsky は述べている(Antonovsky 1987 p212)。

Antonovsky は疾病の発生要因あるいは増悪要因をリスクファクターと呼び、このリスクファクターの軽減と除去に関する知見を蓄積していく従来の近代医学の理論を疾病生成論(Pathogenesis)と呼び、その見地を疾病生成論的アプローチ(Pathogenic approach)と呼んだ。その一方で、健康の回復、保持、増進に関わる要因をサリュタリーファクター(健康要因)とし、このサリュタリーファクターの解明と、健康の回復、保持、増進のメカニズムを解明していく理論を健康生成論(Salutogenesis)、その見地を健康生成論的アプローチ(Salutogenic approach)と呼び、両者の相互補完的な発展こそが重要であると説いた(Antonovsky 1979 pp35-37)。この健康生成論は後のオタワ憲章に始まるヘルスプロモーションの基礎理論として評価されており(Kickbush 1996; Antonovsky 1996)、この健康生成論の中核をなすサリュタリーファクターのうち、中心的な役割を果たすファクターがSOCである(Antonovsky 1979 pp182-187)。

SOC に関する実証研究は web of science によればこの概念が提唱された 1979 年以降 2007 年 9 月までに 1,085 本に上り、年々その数は増加傾向にある¹。これらの実証研究は主に SOC を説明変数においた、SOC の機能や効果に関する研究がほとんどで、縦断研究の結果、罹患率や死亡率を中心とする客観的健康、および QOL や健康度の自己評価を中心とする主観的健康に対する予測力、また、強いストレスにさらされていながらも高い SOC を保つことにより心身の負担を軽減しているというストレス緩衝効果についても検証されている。

このようにストレス対処能力である SOC の効果について多くのエビデンスが得られている一方で、SOC がどのように形成され、どのような要因によって規定されるかという観点からの研究は現時点では極めて限られている現状にある。SOC の発達・形成に関する仮

¹ 2004 年には年間 84 本、2005 年には 113 本、2006 年には 136 本が登録されている

説は、提唱者である Antonovsky により詳細に述べられており、特に乳幼児期から思春期にかけての家庭環境、成功体験を中心とする人生経験、また、思春期から成人初期における社会関係や職業が重要な形成・発達要因として挙げられている。SOC はこうした良好な環境下における人生経験を経て徐々に形成されるものとされる (Antonovsky 1987 p138-148)。本研究は、成人期の SOC にインパクトを及ぼすと考えられる、思春期における社会経済的環境、学業上の成功および成人期の学歴や職業を中心とする社会経済的地位、およびサポート・ネットワークを中心とする社会関係の役割について焦点を当てていく。

以降本章では、まず、SOC 概念、および、その機能と形成に関する仮説モデルである健康生成モデル (Antonovsky 1979 p182-187) を整理し、SOC の予測力や機能に関する実証研究をレビューする。次いで、SOC の具体的な形成過程に関する仮説について健康生成モデルに加え、先行理論を整理したうえで、実証研究のレビューを行なっていく。

(1) 健康生成モデルと SOC 概念について

健康生成論とは、サリュタリーファクターに着眼し、健康を作り出すものは何か、という視点を持つところからはじまる。また、健康の捉え方として、疾患を持つかもたないか、という二元論的な観点でなく、健康と病いの連続体 (ease - dis-ease continuum) として捉えることが健康生成論の基礎となっている。

この健康生成論的な観点で Antonovsky は、健康と病いの連続体に導かれる構造と過程を包括したモデルを提示し、健康生成モデルと呼んだ (Antonovsky 1979 p182)。この健康生成モデルにおけるサリュタリーファクターは、汎抵抗資源 (generalized resistance resources; GRRs) と呼ばれる対処資源、sense of coherence (SOC) と呼ばれる対処能力あるいは人生観に近い因子から成立している。この健康生成モデルは大きく二つの部分に分けることができる。第一の部分とは、人がストレスに遭遇した際には緊張状態が生じるが、サリュタリーファクターの働きにより、この緊張状態の処理に成功することで健康的な状態に移行し、緊張の処理が失敗に終わることでストレス状態に陥り病いの方向に移行するという、ストレスとその対処と健康をめぐる部分である。もう一つの部分とは、サリュタリーファクターのうちその核となるファクターとしての SOC、ならびに、ストレス処理の成否に直接かかわるファクターである GRRs の両概念の関係性と、GRRs の形成過程に関する部分である。

GRRs とは身体的、生化学的、物質的、認知・感情的、評価・態度的、関係的、社会文化的な、個人や集団における特徴のことで、あまねくストレスの回避あるいは処理 (combating) に有用であるものと定義されている (Antonovsky 1979 p103)。身体的、生化学

学的 GRRs とは遺伝的、神経免疫学的な資源、物質的 GRRs とは個人においてはカネ、体力、住居、衣類、食事等、個人間に関しては、権力、地位、サービスの利用可能性といった側面も含む資源である。認知・感情的 GRRs とは知識や知性、知力およびアイデンティティの二つであり、評価・態度的 GRRs とは、主にコーピングにおける行動計画的ストラテジーである合理性、柔軟性、先見性の 3 つの態度が挙げられている。関係的 GRRs とはソーシャルネットワーク、ソーシャルコミットメント、ソーシャル・サポート等の社会関係を指し、社会文化的 GRRs とは、宗教やイデオロギーや哲学を指す(Antonovsky 1979 pp103-119)。

SOC と GRRs との二つの関係性のうち第一の関係性とは、人がストレスに直面したときには、高い SOC を持つことによって、その人が有する GRRs のレパートリーから最も適切な組み合わせと思われるものを選び動員することで対処が進むというプロセスであり、ストレスに対処において前者が動員する側、後者はされる側という関係にあるとされる(Antonovsky 1987 pp160-161)。第二の関係性とは、GRRs により SOC が形成される、という関係である。すなわち GRRs は、一貫性の経験、過大負荷過少負荷のバランス、結果形成への参加、という三種類の人生経験をもち、その人生経験を繰り返し経験することにより SOC が形成されていく、という関係である。SOC の形成要素として機能するとされる GRRs 自体は、社会経済的文脈、文化歴史的文脈、乳幼児期の親の子育てパターン、社会的役割、等の要因の働きにより形成される (Antonovsky 1979 pp182-197)。

この健康生成モデルにおける中核概念であり、ストレスによる緊張処理の成否に大きく関わる SOC とは、Antonovsky により 3 つの下位概念より成立すると定義されている。すなわち、把握可能感(comprehensibility)、処理可能感(manageability)、有意味感(meaningfulness)である。把握可能感とは、「自分の内外で生じた環境刺激は、秩序づけられ、予測と説明が可能なものであるとする確信」の感覚で、処理可能感とは「その刺激がもたらす要求に対応するための資源は、いつでも得られるという確信」の感覚で、有意味感とは「そうした要求は挑戦であって、心身を投入し、かかわるに値するという確信」の感覚を指す(Antonovsky 1987 p23)。

換言すれば、SOC が高い人とは、生活や人生について見通しを定めた一定の見方ができることにより、あらかじめ生じうるストレスを評価し必要時には対処する準備を促すことができる人である。そして、周囲の物理的あるいは心理社会的なあらゆる環境、ならびに自己の両者に対して基本的な信頼を置いていることで、ストレスに対処する際には周囲にある GRRs と言われる多岐に渡る対処資源を効率的に活用することができる人である。さらに、こうした対処の過程について肯定的に捉えることで自分の成長の糧にもできる人であるといえる。

SOC が高い人は柔軟性に富んでおり、例えばストレスに対する問題解決型、情動型、

回避型の各コーピングスタイルと SOC とは必ずしも相関は大きくないという結果(戸ヶ里・山崎 2006)も出ており、柔軟にストレスサーに応じた対処方略を選ぶことができると考えられる。他方で Antonovsky は人生においてその人が主観的に重要と考える領域とその外枠である境界(boundaries)の概念について論じており、この境界が極めて狭い状況にあってもむしろ高い SOC を持っている可能性があるとしている。また、強い SOC とはこうした境界、つまり自身が人生において重要と考えている部分の広さを柔軟にコントロールできることであろうと述べている(Antonovsky 1987 pp27-29)。Antonovsky は逆に柔軟性はないが高い SOC であること²を硬い(rigid)SOC と呼び問題視している(Antonovsky 1987 pp30-33)。

(2) SOC の機能、予測に関する実証研究

Antonovsky(1987)は健康生成モデルの中で、SOC が強い人は心理社会的な GRRs ばかりか生理学的 GRR s、つまり大脳における神経免疫学的あるいは神経内分泌学的な資源をより動員することができ、生体をダメージから守ることで、より健康な状態を維持増進しているという仮説を提示している(Antonovsky 1987 pp178-186)。本節では、アウトカムである健康を大きく、罹患、死亡、免疫機能、主観的健康感、心理・社会的ウェルビーイングの 5 つの側面に分類し、この仮説の検証につながる主要な先行研究を整理していく。

a. SOC と罹患

まず、SOC と疾患の予測に関する実証研究としては、40 歳~55 歳のホワイトカラー職の男性の 8 年間の追跡における年齢、喫煙習慣、コレステロール値、収縮期血圧を制御した上で高 SOC 群に比較し、低 SOC 群で 1.62 倍、冠状動脈疾患の発症リスクが高いこと(Poppius et al. 1999)が示された。40 歳以上の成人では、性、年齢、喫煙習慣、飲酒量に加えて職業をコントロールした上で、8 年間の追跡では、がん発生率は SOC の高群に比して低群では 1.59 倍に達していたが、12 年間の追跡期間では低群と高群の間には有意な差は見られず、SOC はがん発生を遅らせる効果がある可能性が (Poppius et al. 2006)示された。55 歳以上の成人のがん発生率は、SOC 高群に比して低群では 8 年間で 1.65 倍、12 年間で 1.40 倍に達しており、SOC 高群に比して中程度群においても 8 年間で 1.42 倍、12 年間で 1.36 倍に達していること (Poppius et al. 2006)が示された。また、35 歳から 56 歳の糖尿病の診断がされていないスウェーデン人女性 4,821 人を対象とした横断研究で、年齢をコントロールした上で SOC 高群に比して、中の上群は 2.4 倍、中の下群は 3.0 倍、

² 極端に高い SOC である場合が多いとされている(Antonovsky 1987 p33)

低群は 3.7 倍、糖尿病に罹患していること、また、SOC 高群に比し、SOC 中の高群では 2.4 倍、中の低群では 3.1 倍、低群では 4.2 倍の率で高インスリン抵抗群であることがわかった(Agardh et al. 2003)。さらに、英国スコットランド在住の 41 歳から 80 歳までの男女 20,629 名の 7 年間の追跡研究³で、性、年齢、心筋梗塞の既往、糖尿病の既往、高血圧症治療歴、脳梗塞の家族歴、喫煙習慣、収縮期血圧、肥満、社会階級、学歴をコントロールしても、SOC 低群に比して SOC 高群は脳梗塞の発生が 0.76 倍の発生にとどまったと報告している(Surtees et al. 2007)。

また、577 名のフィンランド女性公務員の 4 年間の追跡研究では、SOC が低いと病気欠勤期間が長いこと(Kivimäki et al. 2000)、フィンランド人の女性 433 名の 7 年間の追跡で、敵意攻撃心(Hostility)と病気欠勤期間との関係を検討した際に、追跡 3 年目に測定した SOC が媒介している (Kivimäki et al. 2002)ことが示された⁴。

さらに、15 歳から 64 歳までのフィンランド人男女 2,196 名の 6 年間の追跡で、50 歳未満の障害年金受給発生率は性、初期の健康状態、職業でコントロールしても低 SOC 群で 1.56 倍であったことが示された(Suominen et al. 2005)。

b. SOC と死亡率

次に、死亡率に関しては、40~55 歳のフィンランド人の男性 4,405 名の 8 年間の追跡で、ホワイトカラー職男性では年齢、喫煙、飲酒を調整の上で、SOC 高群に比し、低群では 1.35 倍の死亡リスクがあったという結果が示されている(Poppius et al. 2003)。また、EPIC-Norfolk Study では、喫煙、BMI、社会階級、収縮期血圧、コレステロール値、神経症傾向を制御しても、高い SOC であることは低い SOC であることに比べて総死亡で 0.65 倍、循環器疾患死亡では 0.76 倍、がん死亡に関しては 0.81 倍という値であったこと、男性においてはがん死亡率、女性においては循環器疾患死亡率に有意な差がみられ、前者は 0.66 倍、後者は 0.53 倍であることが示された(Surtees et al. 2003)。さらに Surtees らは独自に開発した Sense of Mastery(SOM)⁵と SOC を同時に回帰式に投入し、EPIC-Norfolk Study のデータを使用し、死亡率への影響を比較した (Surtees et al. 2006)。SOC と SOM の総死亡率の予測は同程度であったが、SOC はがんによる死亡への予測が統計学的に有意であり、心疾患による死亡率の予測は有意にならなかったことに対し、SOM はその逆で、心疾患の方が有意になり、がんの方は有意ではなかったと報告した。

³EPIC(European Prospective Investigation into Cancer)-Norfolk Study

⁴病気欠勤期間は包括的な健康状態を示し、特にその期間が長くなるほど身体的健康を表すことが言われており(Marmot et al. 1995)、Kivimäki らの研究は SOC と身体的健康との因果関係の一部が明らかになったものと考えられる。

⁵SOM とは、生活、人生における局面を宿命的なものではなく自己のコントロールのもとで生じている感覚を指す。

自殺に関しては、自殺企図経験者 150 名を追跡したところ SOC が低いほど 6 ヶ月後の自殺念慮が強く、また自殺企図を起こしていた(Petrie & Brook 1992)ことが示されている。

c. SOC と免疫機能

SOC と免疫機能との関連性に関する実証研究としては、65 歳以上の高齢者 58 名を対象とした際に、ADL 高群の高齢者では SOC と免疫機能との関連性は見られなかったが、ADL 低群の高齢者においては SOC が高いことと NK 細胞活性との関連性が見られ、ADL が低いことによる免疫機能低下との関係性を SOC が緩衝していることが示された(Lutgendorf et al. 1999)。また、石川県のコンピュータ会社に勤務する 35 歳から 65 歳の 125 名の男性を対象にした横断研究では、年齢や Health Locus of Control、喫煙、飲酒、運動習慣等を制御しても SOC が高いほど高い NK 細胞活性、高いリンパ球の占有比率であることが示された(Nakamura et al. 2001)。

d. SOC と健康度の自己評価

SOC と健康度の自己評価(Self-Rated Health; SRH)⁶との関連性の検討としては、スウェーデン、フィンランド、カナダにおける 2,000 人から 6,000 人規模の国民代表サンプルによる SOC を説明変数として SRH を目的変数とした複数の横断研究で、性、年齢等の社会人口学的特性、収入や学歴などの社会経済的地位をコントロールしても SOC が高いほど良好な SRH が得られていたことが示された(Larsson & Kallenberg 1996; Lundberg 1997; Suominen et al. 1999; Ing & Reutter 2003)。さらにフィンランド人 1,976 名を対象とした全国サンプルの 4 年間の縦断研究では、SOC を高群、中群、低群の 3 群に分けて検討した結果、学歴、友人の数を制御しても、男性では SOC 高群に比較して、中群で 1.52 倍、低群で 1.90 倍 SRH が悪化しており、女性においては SOC 高群に比較して中群で 1.53 倍、低群で 2.23 倍 SRH が悪化していることが明らかとなった(Suominen et al. 2001)。

e. SOC とメンタルヘルス・ウェルビーイング

SOC と抑うつ、不安をはじめとする陰性感情との関連性を検討した研究は多く、Erikson & Lindstrom (2005)による横断研究のシステマティックレビューの結果 90%以上の研究では関連性が見られていたことを報告している。わが国においては、都内の 2 総合大学の

⁶主に、「あなたの現在の健康状態はいかがですか」との問いに対して、「とても良い/良い/ふつう/あまり良くない/悪い」などの 5 件法、あるいは「ふつう」を測定しない 4 件法で測定される(艾・星 2005)。健康度の自己評価(Self-rated Health; SRH)は、27 の追跡研究(追跡期間 2~28 年)のほぼ全ての研究で死亡を予測しているという(Idler & Benyamini 1997)報告や、メタアナリシスの結果、身体機能状態や抑うつ、疾患の有病状態をコントロールしても、悪いと回答した人はとても良いと回答した人の 2 倍、死亡危険度が高いこと(Desalvo et al. 2005)、ADL のほか幸福感や自尊心との因果関係が示されている(艾・星 2005)。

大学生を対象とした 2 年間の追跡調査の結果、高い SOC であるほど 2 年後に心身症状が少ない状態で、良好なメンタルヘルスであり、引きこもり傾向が低い状態であったことが報告されている(戸ヶ里ほか 2003)。また、一般住民を対象とした研究では、Hope スケール、陽性感情(Strümpfer & Vivers 1998)、自尊感情、人生満足度、楽観性(Optimism)、統御感(Mastery) (Pallant & Lae 2002)との関連性が示されている。また、大学生を対象とし、SOC が高いほど、キャリア思考インベントリー(Career Thought Inventory; CTD)⁷が良好であること(Lustig & Strauser 2002)、高い SOC であることと、その後の変化が 2 年後の学生生活の満足、学業成績の良好さ、進路決定の良好な進捗状況に影響を及ぼしていること(戸ヶ里ほか 2003)が示されている。労働者を対象とした研究では、高い SOC であることが、高い職務満足、職務関与(Job Involvement)、組織コミットメントの三者と関連すること(Strümpfer & Mlonzi 2001)、技能や職務習慣で表される能力である職務志向性(Task Orientation)、同僚との関係能力である社会的スキル、毎日の仕事内容や仕事の変化に対応できる能力でもあるワークモチベーション、要求される仕事内容に適応できる能力である職務適合度(Work Conformance)、権威者に対して適切に対応できる能力である自己表現性(Personal Presentation)が良好であること(Strauser & Lustig 2003)が示されている。

f. SOC のストレス緩衝効果

健康生成モデルにおける SOC の機能としては、ストレスの緩衝効果が考えられる。大学生を対象として、ストレスフルライフイベントが 2 ヶ月後の身体的症状に及ぼす影響に関する緩衝効果 (Jorgensen et al.1999) および、中学生における学校ストレスの心身症状に及ぼす影響における緩衝効果(Torsheim et al. 2001)、労働職場ストレスがバーンアウトやメンタルヘルスを統合したストレイン指標に及ぼす影響における SOC の緩衝効果(Höge & Büssing 2004)、カナダの一般住民 6505 名におけるストレスフルライフイベントが SRH に及ぼす影響への緩衝効果(Richardson & Ratner 2005)が示されている。他方、わが国においては、一般住民におけるストレスフルイベントが 1 年後の精神健康に及ぼす影響の緩衝効果(高山ほか 1999)、家庭、職場、地域、自己の 4 側面の生活環境におけるストレス量量がストレス量に及ぼす影響に関する緩衝効果(山崎 2003)、高齢者におけるストレスフルライフイベントの経験が抑うつに及ぼす影響に関する緩衝効果(吉井 2006)が示されている。

⁷ キャリア意思決定能力、進路決定へのコミットメント、外的葛藤(重要な人物の考えに左右される程度)の 3 下位因子より成る

(3) SOC 形成に関する理論

以上より、SOC は、死亡、罹患、免疫機能を主とする客観的健康、および、主観的健康感、陰性感情や心理的社会的なウェルビーイングに対して、強力な関連性または予測力を有すること、また、家庭、職場、学校等の生活に由来するストレスによる心身への影響を緩和する機能を有していることが理解できる。

しかしながら、そのような健康保持能力あるいはストレス対処能力概念である SOC の形成はどのような理論の元、形成・規定要因に関する実証研究がどの程度存在するのか。まず SOC の形成理論について整理していく。

a. SOC の形成における GRRs と人生経験 (Life experiences) の役割

Antonovsky は SOC の形成に関する仮説として、性、人種、社会経済的地位やソーシャル・ネットワークを中心とした各種 GRRs により三種類の人生経験のパターン(一貫性、過少負荷-過大負荷のバランス、結果形成への参加) がもたらされ、各パターンの人生経験をくりかえし享受することにより、SOC の下位概念である把握可能感、処理可能感、有意義感が形成されること⁸を提示している(Antonovsky 1987 pp103-109)。

これら 3 パターンの経験に関して、Antonovsky は前者の 2 つを明確に定義しておらず、後年 Sagy & Antonovsky (2000)により詳細に提案されている。彼らの議論を要約すると、一貫性の経験とは、「主にルールや規律を明確に持ち、そのルールについて責任の所在が明確で、価値観もまた明確であること(Sagy & Antonovsky 2000)」に基づく経験である。過小負荷と過大負荷のバランスとは「要求がその人の持つ資源を越えていて、期待を実行できないこと(Sagy & Antonovsky 2000)」と、「供給されている資源を十分に消費できない不完全な刺激(Antonovsky 1979 pp187-189)」の間のバランスの取れた経験である。結果形成への参加の経験については Antonovsky は明確に「自分達の前に設定された課題を快く受け入れ、自分達はその遂行にかなり責任を負い、自分達が何をするのかしないのか(Antonovsky 1987 p107)」という点であると定義している。

この SOC を左右する 3 種の人生経験を規定する GRRs は、さらに社会的歴史的な文脈により左右され、Erikson により提唱された人間のライフサイクルとも密接にかかわり、特に乳幼児期と思春期における経験が重要であるとされる(Antonovsky 1987 pp103-106)。

b. 乳幼児期における SOC の形成

乳幼児期における SOC の形成は、Antonovsky によると大きく、親の子育てのスタイル

⁸ 一貫性の経験が把握可能感に、過少負荷 - 過大負荷のバランスの経験が処理可能感に、結果形成への参加経験が有意義感につながるとされる(Antonovsky 1987 pp106-107)

が、有力な要因として提示されている。すなわち、子ども自身が最も重要な「対象」とする人々 (legitimate others) が消えても再び現れることを当てに出来る、という意識や感覚を与えるように親が接することで、自分の世界が物質的にも社会的にも絶えず変化しているのではなくて頼れるものなのだと言う確信を持つことにつながり、こうした「一貫性の経験」から SOC の下位概念の一つである把握可能感の形成につながるとしている (Antonovsky 1987 pp109-112)。また、子どもに対する 4 種類の親の応答として、無視・拒否・方向付け・激励承認の形態が挙げられ、このうち、方向付けと激励承認の態度が多いほど、バランスの取れた負荷を提供でき、ひいては処理可能感の形成につながるとされている (Antonovsky 1987 pp112-115)。また、親の価値観も重要であり、思考に柔軟性や一貫性があり、いろいろな問題は処理可能で解決可能であると考えている親ほど、応答の質として方向付けや激励承認の態度が多くなり、子どもに良好なバランスのとれた経験を用意することで SOC の発達が進められる可能性を提示している。そして、親の SOC が強ければ強いほど子どもの一連の人生経験を同じく強い SOC へと導くように形作る傾向が強い可能性があるとして述べている (Antonovsky 1987 pp115-116)。

c. 思春期における SOC の形成

Antonovsky は幼少期より思春期における SOC 形成にかかわる最も大きな要因のひとつとして、帰属していた社会階層を挙げている。その根拠としては「社会階層が高いことは、自分で物事を決定し、行動し、その結果に起こることの期待そのものであり、そういった自己の方向付けとは、広い心と、他者への信頼と、信頼できる社会規範をもつことに裏打ちされている」という社会階層と精神科疾患罹患の罹患に関する研究を行った Kohn の発言を挙げている (Antonovsky 1979 pp142-144)。つまり、社会階層において高位置にある人ほどこうした自己の方向付けに必要な機会や経験を思うままに扱いやすくなると述べており、社会経済的地位が高いことは三種の良好な人生経験を得やすいという点で SOC の形成と大きくかかわることが仮説として示されている (Antonovsky 1979 pp142-144; Antonovsky 1987 pp118-121)。また、社会階層以外の要因としては、米国のユダヤコミュニティや 1960 年代の日本の思春期の子どもに見られていたとされる、家族間の絆や相互依存、価値としての教育と目標としての達成があること、人種のアイデンティティが明瞭であること、欲求の充足を延期する行動パターン、コミュニティに情報ネットワークがあること、子どもに家族資源を動員すること、自分の力に自信が持てるようになると苦闘する経験、が挙げられ、これらの心理社会的な家庭環境やそこでの経験が良好な SOC 形成をもたらす可能性が高いとされている (Antonovsky 1987 pp118-121)。

d. 成人期における SOC の形成

乳幼児期や思春期に次いで成人前期が SOC の形成において重要な時期であり、特に職業の果たす役割が極めて大きいとされる(Antonovsky 1987 pp124-125)。

Antonovsky は、SOC の各下位概念の形成と職業との関連性について以下の仮説を展開している。まず、自由裁量度が大きい、つまり課題や仕事の順序やペースを選ぶことが自分の選択範囲内にあると感じている労働者ほど仕事に意味があると考ええる傾向にあるとしている。そして本人が正当にコントロールできるものと認識しており、その意思決定に自分が集合体の一部として参加しているとみなせるかが SOC の形成においては重要であり、こうした自由裁量の程度が、意思決定の参加経験につながり、ひいては SOC の下位概念の一つである有意味感につながると仮定した(Antonovsky 1987 pp128-130)。また、技術的にも専門的にも複雑でありつつも、その仕事をこなすべく、その職場には物的、社会的組織的な資源が配置されており、そして自己の潜在能力を生かせる余地がある点が、負荷のバランスの経験につながり、これも SOC の下位概念の一つである処理可能感につながると説明した(Antonovsky 1987 pp130-132)。さらに、正当なルールに違反しない限り解雇されないと確信されること、その人の職種や従事部門が代案の予告なく余剰としてみなされないこと、事業には安定した利益があると確信されること、現行の社会システムそのものが継続すると確信されること、という四つの職務保証が得られること、仕事集団における価値観の共有や明確な規範の期待があること、これらを得られることが一貫性の経験につながり、SOC の下位概念の一つの把握可能感につながることを提示した(Antonovsky 1987 pp134-135)。

他方で専業主婦役割について Antonovsky は、家庭運営、家事や介護といった側面は SOC を形成する人生経験を十分に供給する可能性があり、夫との良好な関係のもとでの子育ては社会的に価値ある意思決定への参加という特徴をもった SOC 形成につながる人生経験を提供する可能性があると述べているが、その一方で、女性であることも含め主婦役割が社会的に低く評価されている社会においては強い SOC を提供するには不十分な人生経験しか享受できない可能性について言及している(Antonovsky 1987 pp125-127)。すなわち社会によっては、専業主婦が高い SOC あるいは低い SOC である可能性が考えられる。

e. 学校における SOC の形成

SOC の形成過程に関する仮説において、乳幼児期より成人期にかけての GRR s である家庭環境と職業環境の重要性に関しては言及されているが(Antonovsky 1987; Sagy & Antonovsky 2000)、学校環境の重要性についての言及が見られていない。学校は学童期より思春期にかけての心理社会的発達において、特に学校と言う場での人生経験はその後の SOC を形成する上では無視できない経験であると考えられる。

この点について Feldt et al. (2005)は、SOC 形成における学校における人生経験、特に成功体験の重要性について言及しており、学校における課題や目標を適切に達成していくという経験が自己への信頼を増加させることで、SOC が強化されるとしている。また、同じく Feldt et al. (2005)は、学校における成功体験は、自分達のもつ資源のもと、適度な要求の中で過大な負荷や過小な負荷を避け得た結果であることが考えられると述べている。つまり、この過大負荷と過少負荷のバランスという経験は、SOC を形成する三種の人生経験の一つであることから、学校における成功体験は SOC の形成につながる可能性があるものと考えられる。

f. ストレッサーへの成功的な対処による SOC 強化の可能性

Antonovsky はストレッサーへの対処の成功により SOC 自体が強化されるという仮説を提示している (Antonovsky 1979 pp195-196)。また、対処の成功体験には SOC の下位概念のひとつである有意味感が重要で、ある程度の有意味感を初期の段階で有していることがその後の対処の成功の繰り返しにつながり他の SOC の下位要素が高まる、というメカニズムの仮説が提示されている (Antonovsky 1987 pp24-27)。したがって、必ずしも高い SOC でなく、またストレスフルな条件での生活を余儀なくされていたとしても、この状況をうまく潜り抜けることに成功している人においてはより SOC が強化されていく可能性も考えられる。

(4) SOC の形成・規定要因に関する実証研究

以上の SOC の形成理論のもと、どの程度 SOC の形成・規定要因の探索および理論モデルの検証が行われているのか。データベース web of science および Medline で、2007 年 10 月までに登録された英語論文に関して、SOC を従属変数とし幼少期の社会経済的状況、学歴、現在の職業、現在の収入・経済的状況、ソーシャル・ネットワークとの関連性に関する検討をしている論文について検索した⁹。その結果のうち、実際に SOC を従属変数として検討している論文 10 編および、今回の検索式では検出されなかったが左記の検討をしている和文論文も含めた 6 編の計 16 論文の調査国、研究デザイン、調査対象、従属変数、主な独立変数について表 1 に示した。以降これらの先行研究における知見を中心に SOC の形成、規定要因に関するレビューをしていく。

a. 思春期の家族関係、家庭環境、社会経済的地位とその後の SOC との関係

⁹ 検索式：sense of coherence and (socio-economic position or socioeconomic status or socioeconomic conditions or social class or childhood conditions or occupation or social network)

表1 思春期における心理社会的な家庭環境およびその後の社会経済的地位、社会関係とSOCとの関連性を検討した研究¹⁾

著者名(発表年)	調査国	デザイン	対象者	従属変数	主な独立変数
Sagy & Antonovsky(2000)	イスラエル	後ろ向き縦断	イスラエル退職者追跡研究参加者のうち100名	SOC29	家族の社会経済的地位(Socio-Economic Status; SES)および家族の学歴、人生経験(一貫性の経験、負荷のバランスの経験、結果形成への参加の経験、親密性の経験)
Lundberg(1997)	スウェーデン	縦断(1981年と1991年)	Swedish Level of Living Surveyより、25歳から75歳の男女3,949名	SOC-3	思春期の経済的困難、思春期までの家庭内の困難、16歳時の父親の職業、現在の職業
Suominen et al.(1999) ²⁾	フィンランド	横断	15歳以上64歳以下男女4517名	SOC16	学歴、親密な友人数
Smith et al.(2003)	カナダ	縦断(1994年と1998年)	Canadian National Population Surveyの1994年と1998年の二度の調査に回答した14,619名のうち労働に従事している18歳から64歳までのカナダ人男女6,790名	SOC13	職業階層(専門・技術・上級管理職、中間管理職、熟練労働者、熟練ホワイトカラー、農業、半熟練労働者、半熟練ホワイトカラー、非熟練労働者、非熟練ホワイトカラー、農業労働者の5カテゴリ)、世帯収入、
Volanen et al.(2004)	フィンランド	後ろ向き縦断	Finnish Survey on Living参加の25歳以上64歳以下のフィンランド人男女6,506名	SOC13	6歳以前の家庭状況(経済的状況、アルコール依存症者の有無、家庭内で暴力を振るう人の有無、家庭内の不和の有無、および学歴)、現在の雇用状態(被雇用、失業、主婦(夫)、障害年金受給)、職業階層(上位ホワイトカラー、下位ホワイトカラー、ブルーカラー、自営、農業、無職)仕事の重要性、その仕事で自己の技術を活用できるか、配偶状況(未婚、既婚、死別、離別)、世帯構成(子どもなしの二人世帯、単身、独身で親と同居、家庭もち)、配偶者からのサポートの満足、配偶者との関係の良しさ、友人の数、生活を送る上でサポート受領満足
Nilsson et al.(2003) ²⁾	スウェーデン	縦断(1994年と1999年)	WHO MONICAプロジェクト参加の1254名	SOC13	職業(ブルーカラーvsホワイトカラー)
Krantz & Östergren(2004)	スウェーデン	後ろ向き縦断	スウェーデンの地方都市在住の40歳から50歳までの女性397名	SOC13	思春期の経験として、16歳時に両親とともに生活をしてきたか、きょうだいの有無、思春期の虐待経験を問う、社会経済的変数として、学歴、現在の個人収入、職業階層(ホワイトカラー-ブルーカラー)、世帯構成、雇用形態、ソーシャルネットワーク指標としてソーシャルネットワーク(集団への帰属感覚)、社会参加、ソーシャルサポート
Groholt et al.(2003)	北欧5カ国(スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、アイスランド)	横断	2~17歳の子をもつ男女9,524名	SOC-3	職業(高位・中位・低位ホワイトカラー・熟練労働者・非熟練労働者・自営・農業・学生)、教育歴(13年以上、12年、10年~11年、9年以下)、収入(制御のみ)
Volanen et al.(2006)	フィンランド	後ろ向き縦断	Health & Social Support study参加の20歳以上55歳未満のフィンランド人男女でフィンランド語圏19,970名、スウェーデン語圏2,967名を対象	SOC13	思春期の両親の離別体験の有無、思春期の経済的困難、両親との関係、学歴(13年以上、10-12年、9年以下)、配偶状況(非婚者、未婚者、配偶者との関係の満足度、サポートネットワークのサイズ、雇用形態(雇用人、失業者、非雇用人(定年退職者、主婦、学生))
Feldt et al.(2005)	フィンランド	縦断(1974年、1986年、1995年、2000年)	フィンランドの地方都市Jyväskyläに1959年に生まれた173名の女子と196名の男子のハナル調査JYLStudy参加者のうち、14歳、27歳、36歳、42歳に参加した202名	SOC13	14歳時の両親の職業階層に基づく社会経済的地位、14歳時の学業上の成功経験(学業成績)、14歳時に良好な家族関係であるほど(両親の仲が良かったこと、父親と仲が良かったこと、母親がサポートタイプであったこと、親からの過度な体罰がなかったこと)の合成変数)、27歳から42歳までのキャリアの安定性(10年間の職業の変遷を見ていて、常勤、非常勤、学生、無職のいずれにどの程度の年月を費やしており、就職や離職といったイベントをどの程度経験したかを加味した合成変数で得点化)
Wolff & Ratner(1999) ²⁾	カナダ	横断	Canadian National Population Surveyの1994年参加の20,725名	SOC13	手段的、情緒的ソーシャルサポートの受領の有無、社会参加数であるSocial Involvement、他者と接する頻度である Frequency of Contact
Holmberg et al.(2004)	スウェーデン	横断	40歳以上60歳未満のスウェーデン人男性1,782名	SOC29	配偶者の有無、子どもの有無、社会参加数(29の活動の頻度の合計)、ソーシャルネットワーク(食を一緒に食べる人および情緒的サポートネットワーク(問題が起きたり悲しくなったときの話し相手のサイズ(妻、子、親戚、友達、近所の人、同僚、をカウント))
Tsumo & Yamazaki(2007) ²⁾	日本	横断	30歳以上60歳未満の大都市在住男女167名と農村在住男女156名	SOC13	サポート機能別ネットワーク(心配事を聞いてくれる人、病気時看病や世話をしてくれる人、気を配ったり思いやりたりしてくれる人、まとまった金を貸してくれる人、留守時に用事を頼める人、裏切らないと信じられる人)、地域活動参加、定住意向
木村ら(2001) ²⁾	日本	後ろ向き縦断	都内3大学の学部1、2年生男女638名	SOC29	小中学生時の家族関係、小学、中学、高校時の学校における成功体験(学業、運動、芸術)、家族内、外のサポート、ネットワーク数
吉井(2006) ²⁾	日本	横断	中部地方3県15自治体の要介護認定を受けていない65歳以上の高齢者32,891名	SOC13	教育年数、1人あたりの等価所得

1) データベース: web of science およびViclimeにて、2007年10月までに登録された英語論文に関して、SOCを従属変数とし、思春期の経済的困難、学歴、現在の職業、親密性の経験について以下のキーワードで検索した結果(web of science 21件、Viclime 39件、重畳言のうちに、実際にSOCを従属変数として検討している論文10編および、今回の検索式では検出されていない左記の検討していない左記の論文も6編の計16編論文。(検索式: sense of coherence and (socio-economic position or socioeconomic status or socioeconomic conditions or social class or childhood conditions or occupation or social network))

2) 上記のキーワードでのデータベース検索では検出されなかった研究

思春期の家族関係とその後の SOC との関連性について、Lundberg(1997)は、16 歳時の経済的困難と家庭内の困難(親の離死別・家族内不和)の経験のうち、経済的困難は現在の社会的地位を介して現在の SOC に関与することに対し、家庭内の困難は現在の SOC を直接低める効果を有していることを示した。Sagy & Antonovsky (2000)は思春期に家庭内で意思決定への参加経験を有していたこと、親の学歴が高いことが、65 歳以降の高い SOC に関与していたことを示した。Volanen et al. (2004)は、16 歳以前の家庭における経済的困難、アルコール依存者の存在、家庭内暴力の存在、家庭内不和の各項目について、多く遭遇するほど性、年齢、学歴によらず低い SOC と関連していることを示した。また、Volanen et al. (2006)は、思春期までの両親の離死別経験、思春期における経済的困難、親との関係のうち、経済的困難がなかったこと、親との関係が良好であったこととその後の SOC との関連性を示した。Feldt et al. (2005)は 14 歳時に良好な家族関係であったことが 42 歳時に高い SOC であったという直接の関連性を示した。一方で、Krantz & Östergren (2004)は、16 歳時の両親との同居、きょうだいの有無、学童～思春期の虐待経験は SOC とは直接関係がなかったことを示した。

国内の研究では、小中学生時代のサポータティブな家庭環境がその後の大学生における良好な SOC と関連すること(木村ほか 2001)、親が評価した家族関係性が良好であることや家庭内のイベントにおける意思決定への参加経験がある場合に子どもにおいて良好な SOC があらわれていること(戸ヶ里ほか 2006)、小学生時代の家庭における意思決定への参加経験があるほど高校生において良好な SOC であること(戸ヶ里ほか 2007b)が示されている。

思春期の家庭の社会経済的地位と SOC との関連性に関して、Lundberg (1997)は多変量解析の結果、現在の職業を介して間接的に現在の SOC と関連することを示した。Feldt et al. (2005) は父親の職業威信度はその後の学歴を介して間接的に成人後の SOC と関連することを示している。

b. 学校環境・学校における成功体験と SOC との関連性の検討

国外の検討では、Feldt et al. (2005)は 14 歳時の学業成績は、その後の学歴を介して間接的に成人後の SOC に関連することを示した。国内においては、中学生時の学業・運動・美術における成功体験が大学入学後の良好な SOC と関連すること (木村ほか 2001)、小学生において学芸会や運動会といった学校行事における意思決定への参加経験があること、学校帰属感覚¹⁰が良好であることと高い SOC であることが関連すること(戸ヶ里ほか 2004; 戸ヶ里ほか 2006)、小学生時に学校行事や友人との関係における意思決定への参加

¹⁰学校への高い帰属感、学校職員との良好な関係、学校における低い疎外感より成立する(戸ヶ里ほか 2007a)

経験を有すること、中学生時の学業成績が良好であったことが、高校生時の良好な SOC と関連をみせていたこと(戸ヶ里ほか 2007b)が示されている。

c. 学歴と SOC との関連性の検討

学歴と SOC 得点との関連性を検討した研究はいくつかみられている。大学卒に比して、専門学校卒では男性で 1.2 倍、女性で 2.0 倍、高校卒では男性で 1.5 倍、女性で 3.1 倍、低い SOC 群に属すること(Suominen et al. 1999)、教育年数が高くなるほど、その後の 65 歳以降の SOC スコアが高くなる直接効果があること(Sagy & Antonovsky 2000)、教育年数 13 年以上の群に比して、9 年未満の群において男女ともに低い SOC スコアであること(Volanen et al. 2004; Volanen et al. 2006)、わが国においては 65 歳以上の高齢者において年齢調整の元で、教育年数が高いほど SOC が高いという関連性 (吉井 2006)が示されている。しかし、これらはその後の職業や経済状態を制御した結果ではない。その後の職業を制御した結果を示している研究は 2 つのみにとどまる。まず、女性において国籍、年齢、そして職業を制御して、教育年数が 13 年以上の群に比し、12 年の群で 1.3 倍、10~11 年の群で 1.4 倍、9 年以下の群で 1.6 倍、低い SOC である直接効果 (Grøholt et al. 2003)があることが示された。他方で Feldt et al. (2005)は、学校における成功体験としての学力をコントロールした場合には、教育年数が高いことはその後の職業を介して成人後の良好な SOC に関与する間接効果を有するに過ぎないことを示した。

d. 職業と SOC との関連性の検討

現在の職業と SOC との関連に関しては、上位ホワイトカラー層に比して、中位ホワイトカラーでは 1.70 倍、下位ホワイトカラーでは 2.06 倍、自営では 1.48 倍、農業では 3.01 倍、熟練労働者では 3.04 倍、非熟練労働者では 3.93 倍低い SOC であること(Lundberg 1997)、上位ホワイトカラーに比して、男女ともに下位ホワイトカラー、ブルーカラー、農業で低い SOC であったこと (Volanen et al. 2004)、ホワイトカラーがブルーカラーに比して SOC が良好な人が多いこと (Krantz & Östergren 2004)、高位のホワイトカラーに比して、低位のホワイトカラーで 1.38 倍、非熟練労働者で 1.58 倍、低い SOC が見られたが、中位、自営・農業、学生のカテゴリでは関連が見られなかったこと(Grøholt et al. 2003)が示されている。また、縦断研究では、専門技術管理層に比して、男性では非熟練層で 2.00 倍 SOC スコアが低下しており、女性では、熟練層で 1.62 倍、半熟練層で 2.41 倍、非熟練層で 2.45 倍 SOC 低下群に属するが、その一方で、SOC の上昇群では統計学的有意差が見られなかったこと(Smith et al. 2003)、5 年間の追跡期間で男女ともに自営業層、女性のブルーカラー層では変化はないが、男性のブルーカラー層、男性のホワイトカラー層、女性のホワイトカラー層で SOC の低下が見られたことを示されている (Nilsson et al.

2003)。

その一方で、雇用状態に関しては、学歴や幼少期の困難な経験によらずに、被雇用者に比して失業者と障害年金受給者は低い SOC であり、現在の職業によらずに SOC と関連を見せていたこと (Volanen et al. 2004)、雇用者に比して、失業者において有意に低い SOC が見られたが、非雇用者 (定年退職者、主婦、学生) では差が見られなかったこと (Volanen 2006)、さらに、27 歳から 42 歳までのキャリアの安定性¹¹があるほど 42 歳時の SOC が高いことが示されている (Feldt et al. 2005)。

e. 現在の経済的状況・収入と SOC との関係

SOC と現在の経済的状況との関連性に関しては、女性においてのみ、低い世帯収入であるほど SOC が低下したが、収入が高いほど SOC の上昇は認められなかったこと (Smith et al. 2003)、個人収入の高低と SOC の高低との間には関連が見られなかったとする報告 (Krantz & Östergren 2004)、わが国で、65 歳以上の高齢者においては年齢調整の元で、同居家族一人当たりの等価所得が高いほど SOC も高いという報告 (吉井 2006) が見られている。

f. 現在の婚姻状態、ソーシャル・ネットワーク、サポートネットワーク

SOC の形成を促す人生経験を提供するとされる GRRs のうち SOC との関連性についての検討で散見されるのが配偶関係、家族形態も含めたソーシャルネットワーク、またサポートネットワークである。配偶状態に関しては既婚者に比して男性では未婚、離別者で、女性ではさらに死別者においても低い SOC がみられたとする報告 (Volanen et al. 2004)、既婚者に比して未婚者で低い SOC であったとする報告 (Volanen et al. 2006, Holmberg et al. 2004) がある。

また、年齢によらず子どもを有する場合に比して、有さない場合に低い SOC であること (Volanen et al. 2006; Holmberg et al. 2004) が示されているほか、友人数が多いこと (Krantz & Östergren 2004; Suominen et al. 1999)、社会参加数が多いこと (Holmberg et al. 2004; Krantz & Östergren 2004; Wolff & Ratner 1999)、余暇活動への参加数が多いこと (Suominen et al. 1999)、手段的サポートを受領できること (Wolff & Ratner 1999; Volanen et al. 2004; Krantz & Östergren 2004)、情緒的サポートを受領できること (Wolff & Ratner 1999)、情緒的サポートネットワークのサイズが広いこと (Holmberg et al. 2004)、他者と接する頻度が多いこと (Wolff & Ratner 1999)、集団への帰属感覚 (Social Anchorage) が強いこと (Krantz & Östergren 2004)、サポート機能別ネットワーク数が多

¹¹ 15 年間の職業の変遷を表しており、常勤、非常勤、学生、無職のいずれにどの程度の年月を費やしており、就職や離職といったイベントをどの程度経験したかを加味した合成変数で得点化している。

いこと(Tsuno & Yamazaki 2007)、家族以外のサポートネットワークのサイズが広いこと(木村ほか 2001)の各々が高い SOC に関連することが示されている。

g. ストレッサーの成功的な対処により SOC の強化につながったとする先行研究

ストレッサーへの成功的対処が SOC の強化につながるという仮説の実証研究はきわめて限られているのが現状である。脳外傷を負いその後回復した対象者において、一般住民よりも高い SOC が見られていると言う報告(McGrath & Linley 2006)や、薬害 HIV 被害者遺族において一般住民とほぼ変わらない SOC スコアが見られているとする報告(八巻 2003)があるにとどまっている。

(5) 健康の社会経済的格差・不平等のメカニズムにおける健康生成論および SOC 概念の寄与について

健康の社会経済的格差・不平等のメカニズムとして Adler et al. (1994)は健康関連習慣による媒介、心理学的な気質や性格による媒介、ストレスフルなライフイベントや慢性ストレッサーによる媒介、社会経済的地位(Socio-economic status: SES)の相対的順序によるストレスの四点を挙げており、またこれらに加えて橋本(2006)は、物質的な資源の絶対量の違い、ソーシャルキャピタル¹²の欠如によるストレスを挙げている。とくに、収入の相対的格差によるストレスを健康格差の要因であるとした相対所得仮説を提示している Wilkinson により(Wilkinson 1992; Wilkinson & Pickett 2006)、収入にとどまらず相対的な SES の順位そのものによるストレスが健康度を規定している可能性が高いことが論じられている(Wilkinson 2006)。また、職業階層間の健康の不平等に関して職場の心理社会的環境に基づくストレインによる媒介あるいは修飾効果が挙げられている(Siegrist & Marmot 2004; 堤 2006)。

健康生成モデルにおいて、SES、あるいは性別、人種といった健康の社会的格差・不平等の規定要因は、GRRs (汎抵抗資源) という対処資源である一方で、ストレス対処能力概念 SOC を形成する良好な人生経験を提供する存在として位置づけられている(Antonovsky 1979 pp182-192)¹³。良好な SES によりもたらされた良好な環境が、さらに

¹² ソーシャルキャピタルとは社会や地域における制度の特徴を指し、個人あるいは集団における協調的な行動を起こす上での資源となる、信頼・互酬性(reciprocity)の規範・相互扶助から成る(Kawachi & Berkman 2000)。ソーシャルキャピタルが高い地域であるほど好ましくない健康行動をする人が少なく、健康に関連する地域活動・輸送運輸手段・レクリエーション施設等のサービスやアメニティにアクセスしやすく、犯罪・近隣との争い・騒音や振動といったストレスフルな環境が少ないことの凡そ三つの過程を経ることで個人の健康と関連するといわれている(Kawachi & Berkman 2000)

¹³ さらに上記の健康の社会経済的格差のメカニズムとして挙げられていた媒介要因である、物質的な資源やソーシャルキャピタル、生活環境や職場環境に由来するストレッサーがない状態も GRRs と考える

良好な SOC をもたらすことにより、その後の良好な健康状態がもたらされる、という SOC による媒介モデルが考えられる。

他方で、Antonovsky は、SES が低い状態に限らず、汎抵抗資源がない状況のことを、汎抵抗欠損(General Resistance Deficits; GRDs)と呼び、この汎抵抗欠損こそが慢性ストレスの実体であるとも述べている(Antonovsky 1987 pp34-39)。つまり健康生成モデルの立場においては、劣悪な SES からくる慢性ストレスに対し、ストレス対処能力概念である SOC を駆使することで使用可能な対処資源のレパートリーから選択、動員し、対処に成功し、良好な健康を得ることができるとする SOC の緩衝効果のモデルも考えられる。緩衝効果のモデルは、すでに形成された SOC が、悪条件の SES、すなわち汎抵抗欠損の状況に由来するストレス影響を緩和し良好な健康状態をもたらす可能性があることから、健康の不平等の緩和への糸口としても期待される(近藤 2005)。ただしこうしたストレスへの対処の成功もまた SOC を強化する要因であるとも言われており(Antonovsky 1979 pp193-194)、悪条件の SES であっても SOC が維持されるケースは十分に考えることができる。

先行研究において、SES と健康と SOC との関係に関する研究は数少ないながらも、SES が健康に及ぼす影響に関して SOC が媒介効果を有している研究、SOC が緩衝効果を有しているとする研究の両者がみられている。SOC が媒介効果をもつとする仮説を検証した研究は、Lundberg (1997)による研究と、Suominen et al. (1999)による研究が見られている。Lundberg はスウェーデンの Level of Living Surveys の 1981 年と 1991 年のパネルデータを使用した研究で、幼少期の SES や経済的困難は成人期の SES を介して現在の健康状態(精神的負担感、循環器疾患の罹患状態、痛み)に影響し、また成人期の SES は SOC を介して健康に影響する間接効果を持つことを示した。ただし、幼少期の SES が成人期の SOC を介して健康状態に影響するパスは有意にならなかったことを示している。また、SOC と現在の健康状態とは同時点で測定している。

また、4,517 名のフィンランド人を対象とした横断研究で、学歴および友人数、余暇活動参加、と SRH と SOC の関係を男女別に検討したところ、男性では教育、友人数は SOC を媒介しての間接効果と直接効果の両者が見られ、余暇活動参加は SRH に対し SOC を媒介する間接効果のみが見られたことを示している。女性は、友人数は SRH と関連を見せず、学歴が SOC を媒介しての間接効果と、媒介しない直接効果を有し、余暇活動の参加数は、SOC を媒介する間接効果のみが存在していたことを示した(Suominen et al. 1999)。

他方で、媒介効果と緩衝効果との両者を仮説として検討した結果も示されている。Ing &

ことができる

Reutter (2003)は、1994年のカナダの National Population Health Survey に参加した 20 歳から 64 歳までの女性 6,748 名を対象に、収入と SRH との関係において SOC の媒介効果の検討を行い、パス解析の結果 SOC を介して SRH に影響する間接効果と SOC を介さず直接影響する直接効果の両者が存在することを示した。しかしながら、SOC が、収入の SRH に及ぼす影響を緩衝するという仮説の下、緩衝効果の検討を行ったが検証にはいたらなかった。

緩衝効果の存在については、わが国の中部地方の 65 歳以上の高齢者 32,891 名を対象とした調査で、教育年数および等価所得と SRH との関連において、いずれにおいても、緩衝効果を有する可能性が示された(吉井 2006)。

いずれの研究においても、SOC と健康指標の関連の検討においてはクロスセクショナルのデータを使用した検討にとどまっているが、健康生成モデルと SOC が健康の不平等のメカニズムの説明に大きく関与する可能性が考えられる。

(6) 本研究の目的

Antonovsky により提示された健康生成モデルに関して、ストレス対処能力あるいは健康保持能力概念 SOC の健康維持増進に関する機能に関して多くの研究がなされ、SOC が健康に対して強力な予測力をもち、ストレス緩衝効果をもつ、ということが明らかになってきた。しかしながら、Antonovsky により仮説的に明らかにされている幼少期の社会経済的な家庭環境その後の社会経済的地位、ソーシャルネットワークをはじめとした汎抵抗資源や、その資源から提供される成功体験も含めた人生経験により SOC が形成されるという形成過程あるいは規定要因に関する実証研究は、これまでにわずかな研究でしか検討されておらず、また、検討されている地域も北欧、カナダが中心で極めて限られている。したがって SOC の形成・規定要因に関する研究が必要であり、わが国における大規模全国サンプルでの検討も必要である。また、健康生成モデルおよび SOC は健康の社会経済的格差・不平等のメカニズムを説明するモデルと考えられ、SOC による媒介モデルと緩衝モデルが考えられるが、本研究は SOC の形成要因に着眼することからも、媒介モデルの立場をとり、SOC を従属変数とすることによって、この検討を行う必要がある。

さらに、現在のわが国における 20 歳から 40 歳までの人々は、社会経済的な状況は出生年代において大きく変動しており、発達心理学的な観点も加味した上で世代間別の検討が必要であると考えられる。さらに、近年増えつつある派遣産業や請負産業を含めた非正規雇用という雇用形態をとる若者が増えているという側面についても考慮する必要がある。

そこで、本研究では、Antonovsky による SOC の形成仮説に基づき、SOC の形成・発達

上重要な役割を果たすと考えられる思春期における社会経済的環境、学業上の成功および成人期の学歴や雇用形態も加味した職業を中心とする社会経済的地位、および配偶関係やサポートネットワークを中心とする社会関係といった要因と現在の SOC との関連性を、20 歳から 40 歳までの男女に関する大規模全国サンプルにおいて、20 歳以上 25 歳未満、25 歳以上 35 歳未満 35 歳以上 40 歳以下の 3 群で検討し、ストレス対処能力概念 SOC の形成に関するモデルを探索することを目的とする(研究 2)。また、本研究はストレス対処能力 SOC の形成に関する理論構築に寄与することに加え、SOC 形成を促し、最終的には健康の維持増進に至るための、個人あるいは環境に対する臨床的介入プログラムの開発あるいは政策立案における基礎資料とすることをねらいとする。

2. 方法

(1) 対象と方法

2007 年 1 月 1 日現在で日本国内に在住の満 20 歳以上 40 歳以下の男女を性、年齢、居住都市による層化 2 段無作為抽出によりサンプリングした。第 1 段抽出単位としては都市規模により市町村単位で全国 271 地点を抽出し、第 2 段抽出単位として各地点で性年齢別に住民基本台帳より等間隔抽出した。なお、男性の 35 歳未満の層および 35 歳~40 歳の層における回収率が低くなる見込みから、35 歳未満の層に関しては女性よりも 20% 多く、35 歳~40 歳の層では 15% 多くサンプリングをした。

自記式調査票を郵送で配布し、調査員により訪問回収を行った。2007 年 1 月上旬に調査の実施に関する葉書を対象者に送付し、1 月下旬に調査票を郵送した。2 月上旬に調査員による訪問回収を実施した。調査協力者には 1,000 円の図書カードを謝品として渡した。回収数は 4,801 票で、極端に回答に偏りのあった 1 票を除いた 4,800 名を分析対象とした。

(2) 対象と方法

a. SOC3-UTHS

SOC3-UTHS(University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 scale)は、Antonovsky によって提示された SOC の下位概念の定義、すなわち、処理可能感；「将来、人生の大事な場面で問題や困難に直面したとき、のりこえるために必要な資源(人・モノ・財産・自分の能力)を自由に使える」感覚、有意味感；「将来直面する問題や困難のうち、少なくともいくつかは、エネルギーを投入するに値する挑戦になりうる」感覚、把握可能感；「将来直面することになる問題や困難を、ある程度予測することができる」

感覚、を平易な文章に修正し、研究者 8 名で内容妥当性を確認したものである (Togari et al. 2007)。

なお、測定においては以下 3 点について注意して作成した。第 1 に、項目内容の時間軸に関しては現時点での考えを扱った。第 2 に、SOC29、SOC13、SOC-3 に見られる、「・・・と覚ることがありますか？よくある～まったくない」といった、感覚の頻度を問う疑問文の質問は排除した。これは SOC 測定の際に問題視されるネガティブ感情の影響 (Strümpfer & Vivers 1998, Eriksson & Lindstrom 2006) を考慮するため、新規項目は平叙文とし、同意(あてはまる～あてはまらない)を測定した。第 3 に分散を考慮して「非常によくあてはまる～まったくあてはまらない」の 7 ポイント SD 法を採用した。さらに今回の調査にあたっては日本語表記について平易に修正を行った。

b. 属性に関する変数

性、年齢を用いた。年齢は、心理学的発達段階および社会経済的時代背景を基準に 20~24 歳、25~34 歳、35~40 歳の 3 カテゴリに分類した。

c. 思春期における社会経済的環境

① 15 歳時の父親の職種

父親の職業について自由記載されたものを 1995 年 SSM 調査¹⁴における職業小分類に基づきコード化し職業大分類に基づきカテゴリ化した。また、父親不在者、わからないとした人、欠損者を含めた合成変数を作成した。次に職種を専門・技術職および管理職を一つのカテゴリに、事務、販売、サービス職をホワイトカラーとし、生産現場・技能職、運輸・保安職をブルーカラーとし、父親不在者と無職者を一つのカテゴリに、わからないとの回答と欠損者を一つのカテゴリとし、計 5 カテゴリからなる合成変数を用いた。

② 15 歳時の家庭の経済的状況

「あなたが 15 歳だった頃、あなたのお宅の暮らし向きはこの中のどれにあたるでしょうか」という問いに対して「豊か」から「貧しい」の 1 項目 5 件法で測定し、分析にあたっては「豊か・やや豊か」「ふつう」「やや貧しい・貧しい」の 3 カテゴリ、およびわからないとの回答と欠損者を一つのカテゴリとし、計 4 カテゴリからなる変数として扱った。

③ 中学 3 年時の学校における成功体験

「あなたが中学 3 年生のとき、あなたの成績は学年の中でどれくらいでしたか」と

¹⁴ Social Stratification and Morbidity (社会階層と社会移動) 調査。わが国の社会学分野の研究者らによって 1955 年より日本社会の階層構造とその変動を実証的に研究することを目的に 10 年ごとに実施されている大規模一般住民調査。

いう問いに対して、「上の方」「やや上の方」「真ん中あたり」「やや下のほう」「下のほう」の 5 カテゴリで測定した。また、わからないとの回答と欠損者を一つのカテゴリとし、計 6 カテゴリからなる変数を扱った。

④ 学歴

「あなたが最後に通った（または現在通学中の）学校はどれですか」という問いに対し、「中学校」「高等学校」「専修学校(専門学校)」「短期大学・高等専門学校(5年制)」「大学」「大学院」の 6 カテゴリで測定し、「中学校」「高等学校」を合わせた「高校以下」のカテゴリを新たに作成し、5 カテゴリで扱った。

d. 現在の職業と雇用形態

まず、有職者については、自由記載されたものを 1995 年 SSM 調査における職業小分類に基づきコード化し、職業大分類に基づき「専門・技術職」「ホワイトカラー（事務・販売・サービス職）」「ブルーカラー（生産現場職・技能職・運輸・保安職、農林水産業）」にカテゴリ化した。その一方で雇用形態に関して「正社員、正職員」「家族従業者」を「正規雇用」とし、「パート・アルバイト・契約・臨時・嘱託」および「派遣社員」「請負社員」「内職」を「非正規雇用」とし、「経営者・役員」および「自営業主、自由業者」は一つのカテゴリとして扱った。また、無職者に関しては、学生、家事従事者、そのほかの 3 カテゴリで測定し、「家事従事者」のうち既婚者¹⁵を「主婦(夫)」とし、「家事従事者」のうちの非婚者および「そのほか」と回答したものは「無業者」として扱った。

以上の変数を合成し、「経営者・役員、自営業主自由業者」「専門技術職・正規雇用」「専門技術職・非正規雇用」「ホワイトカラー・正規雇用」「ホワイトカラー・非正規雇用」「ブルーカラー・正規雇用」「ブルーカラー・非正規雇用」「専業主婦(夫)」「無業」「学生」の計 10 カテゴリよりなる合成変数を作成した。

e. 現在の経済的状況

「現在のあなたのお宅の暮らし向きはこの中のどれにあたるでしょうか」という質問に対して「豊か」「やや豊か」「ふつう」「やや貧しい」「貧しい」の 5 件法を用いた。分析にあたっては「豊か・やや豊か」「ふつう」「やや貧しい・貧しい」の 3 カテゴリとした。

f. 現在の婚姻状況と子どもの有無

既婚者と、未婚者、離別者、死別者の 2 カテゴリとし、既婚者を子どもの有無で二分

¹⁵ 事実婚を含む

し、「既婚・子どもあり」「既婚・子どもなし」「未婚・離死別」の3カテゴリを扱った。

g. サポートネットワーク

サポートの利用可能範囲を測定するため、以下の方法で測定、操作した。つまり、「あなたは次のA~Dについて相談したり頼んだりするときに、どのような方になさいますか」という問いに対し、「A 自分の仕事や勉強のこと」「B 仕事を紹介してもらうこと」「C 友人、恋人、配偶者などとの人間関係のこと」「D 失業や病気でお金が必要になったときにまとまったお金を貸してもらう」の4つの支援機能に対し、「親」「配偶者または恋人」「子ども」「兄弟姉妹」「その他の親戚」「仕事関係の友人知人」「学生時代の友人知人」「その他の友人知人」を多重回答で測定した。各支援機能別に、その回答数をもってサポートネットワークのサイズに関する変数として扱った。

(3) 分析方法

2 変量間の関係は一元配置分散分析と多重比較(Tukey 法)、規定要因との関連性の検討には、Ordinary Least Square(OLS)推定法による階層的な多重回帰分析（以下 OLS 回帰分析）を実施した。有意確率は5%とした。分析には SPSS15.0J for Windows を使用した。

3. 結果

(1) 各要因別の SOC3-UTHS スコア分布(表 2)

単純に 2 変量間の関係を各カテゴリ別の平均スコアの比較により検討した。その結果、性別においてはどの世代においても有意差は見られなかった。

また、現在の婚姻状況と子どもの有無に関するカテゴリにおいては、統計学的には25~34歳の群において未婚・離死別者群と、既婚者群との間に有意差が見られるのみにとどまったが、各世代において未婚・離死別者よりも既婚者、特に子どもを有する既婚者において若干高いスコアの分布が見られていた。しかしながら、非婚・既婚のカテゴリ変数は主婦(夫)ダミー変数と相関が高く($r=.081$)、共線性を考慮して現在の婚姻状況と子どもの有無に関する変数は多変量解析では投入しなかった。

表2 SOC3-UTHSスコアの各要因別分布

	20-24歳				25-34歳				35-40歳			
	度数	(%)	平均値 ±SD	多重比較 ¹⁾	度数	(%)	平均値 ±SD	多重比較 ¹⁾	度数	(%)	平均値 ±SD	多重比較 ¹⁾
性別												
男性	470	(48.6)	14.7 ±3.7		1,202	(50.8)	15.0 ±3.5		666	(46.9)	15.2 ±3.4	
女性	498	(51.4)	14.8 ±3.3		1,163	(49.2)	14.9 ±3.3		754	(53.1)	14.9 ±3.3	
15歳時の父親の職業												
専門・管理職	226	(23.3)	15.4 ±3.4	}	452	(19.1)	15.4 ±3.2	}	227	(16.0)	15.8 ±3.4	}
ホワイトカラー	282	(29.1)	14.9 ±3.4		679	(28.7)	15.1 ±3.4		384	(27.0)	14.9 ±3.1	
ブルーカラー	363	(37.5)	14.5 ±3.4		1,009	(42.7)	14.9 ±3.4		674	(47.5)	14.9 ±3.3	
不在or無職	45	(4.6)	15.1 ±3.9		87	(3.7)	15.3 ±3.2		71	(5.0)	15.5 ±3.8	
わからないor欠損	52	(5.4)	13.4 ±4.1		138	(5.8)	13.6 ±3.9		64	(4.5)	14.3 ±3.2	
15歳時の家庭の経済的状况												
豊か/やや豊か	274	(28.4)	16.0 ±3.2	}	503	(21.4)	15.7 ±3.4	}	203	(14.3)	15.8 ±3.3	}
ふつう	550	(56.9)	14.4 ±3.2		1,491	(63.3)	14.8 ±3.3		914	(64.5)	15.0 ±3.3	
やや貧しい/貧しい	129	(13.4)	13.9 ±4.5		328	(13.9)	14.9 ±3.5		287	(20.2)	14.9 ±3.3	
わからない/欠損	13	(1.3)	12.8 ±3.9		32	(1.4)	13.3 ±4.8		14	(1.0)	12.5 ±2.7	
中学3年時の学業成績												
上	171	(17.7)	16.2 ±3.0	}	340	(14.4)	16.2 ±3.4	}	197	(13.9)	15.8 ±3.2	}
やや上	225	(23.2)	15.4 ±3.3		570	(24.1)	15.8 ±2.9		328	(23.1)	15.8 ±2.9	
真ん中	303	(31.3)	14.5 ±3.4		746	(31.5)	14.7 ±3.1		520	(36.6)	14.9 ±3.2	
やや下	136	(14.0)	14.0 ±3.2		392	(16.6)	14.5 ±3.3		214	(15.1)	14.5 ±3.5	
下	104	(10.7)	13.3 ±4.2		242	(10.2)	13.4 ±4.1		129	(9.1)	13.8 ±3.8	
わからない/欠損	29	(3.0)	12.6 ±3.6		75	(3.2)	13.1 ±3.7		32	(2.3)	13.8 ±4.1	
学歴(中退・在学中含む)												
高校以下	219	(22.8)	13.6 ±4.0	}	679	(28.8)	14.2 ±3.6	}	539	(38.0)	14.4 ±3.6	}
専修(専門)学校	165	(17.2)	14.7 ±3.4		494	(21.0)	14.6 ±3.2		265	(18.7)	15.0 ±3.2	
短大・高専	99	(10.3)	14.9 ±3.3		305	(12.9)	15.2 ±3.3		212	(15.0)	15.3 ±3.0	
大学	452	(47.1)	15.2 ±3.2		772	(32.8)	15.7 ±3.2		353	(24.9)	15.8 ±3.0	
大学院	25	(2.6)	16.5 ±2.8		106	(4.5)	16.6 ±2.7		48	(3.4)	16.1 ±3.7	
現在の職業と雇用形態												
正規・専門/技術	85	(8.9)	15.0 ±3.1	}	343	(14.7)	15.8 ±2.9	}	169	(12.1)	15.7 ±3.2	}
非正規・専門/技術	21	(2.2)	15.6 ±3.0		78	(3.3)	15.9 ±3.0		48	(3.4)	15.7 ±3.7	
管理/自営	13	(1.4)	13.3 ±4.4		105	(4.5)	15.9 ±3.5		124	(8.9)	16.0 ±3.2	
正規・ホワイト	155	(16.2)	14.7 ±3.4		612	(26.3)	15.2 ±3.2		345	(24.7)	15.0 ±3.1	
非正規・ホワイト	113	(11.8)	14.4 ±3.7		265	(11.4)	14.4 ±3.5		170	(12.2)	14.9 ±3.1	
正規・ブルー	96	(10.0)	14.1 ±3.7		372	(16.0)	14.2 ±3.6		195	(14.0)	14.7 ±3.3	
非正規・ブルー	46	(4.8)	12.6 ±3.5		129	(5.5)	14.2 ±3.5		93	(6.7)	14.0 ±3.6	
無業	26	(2.7)	12.0 ±3.8		86	(3.7)	13.6 ±4.1		42	(3.0)	13.9 ±3.9	
専業主婦(夫)	24	(2.5)	14.8 ±4.1		296	(12.7)	15.2 ±3.2		208	(14.9)	15.0 ±3.2	
学生	380	(39.6)	15.5 ±3.2		44	(1.9)	15.8 ±4.3		-			
現在の経済的状况												
豊か/やや豊か	276	(28.7)	15.9 ±3.3		463	(19.7)	16.0 ±3.2		268	(18.9)	16.3 ±3.1	
ふつう	531	(55.2)	14.5 ±3.3		1,457	(62.0)	14.9 ±3.3		869	(61.4)	15.0 ±3.2	
貧しい/やや貧しい	155	(16.1)	13.5 ±3.9		429	(18.3)	14.0 ±3.5		279	(19.7)	14.1 ±3.5	
現在の婚姻状況と子どもの有無												
未婚・離死別	908	(93.9)	14.7 ±3.5		1,230	(52.3)	14.7 ±3.5	}	381	(26.9)	14.8 ±3.3	
既婚・子どもあり	44	(4.6)	14.8 ±3.9		877	(37.3)	15.1 ±3.4		909	(64.2)	15.1 ±3.3	
既婚・子どもなし	15	(1.6)	15.9 ±3.1		247	(10.5)	15.4 ±3.0		125	(8.8)	15.4 ±3.3	
仕事や勉強の相談												
0	48	(5.0)	13.2 ±3.8	}	131	(5.5)	13.9 ±4.6	}	91	(6.4)	13.5 ±4.4	}
1	369	(38.1)	14.3 ±3.7		1,049	(44.4)	14.6 ±3.4		699	(49.2)	14.8 ±3.4	
2	236	(24.4)	14.8 ±3.3		583	(24.7)	15.2 ±3.2		379	(26.7)	15.5 ±3.0	
3以上	315	(32.5)	15.5 ±3.2		602	(25.5)	15.7 ±3.1		251	(17.7)	15.8 ±3.0	
仕事を紹介してもらう												
0	364	(37.6)	14.1 ±3.5	}	940	(39.7)	14.6 ±3.5	}	521	(36.7)	14.5 ±3.5	}
1	381	(39.4)	15.0 ±3.5		930	(39.3)	15.0 ±3.3		607	(42.7)	15.1 ±3.3	
2	138	(14.3)	14.9 ±3.3		323	(13.7)	15.3 ±3.2		177	(12.5)	15.8 ±2.9	
3以上	85	(8.8)	16.0 ±3.1		172	(7.3)	15.8 ±3.0		115	(8.1)	16.1 ±2.5	
人間関係の相談												
0	86	(8.9)	12.8 ±4.1	}	241	(10.2)	14.0 ±4.3	}	154	(10.8)	13.6 ±4.3	}
1	399	(41.2)	14.5 ±3.5		996	(42.1)	14.6 ±3.5		656	(46.2)	14.9 ±3.3	
2	235	(24.3)	15.0 ±3.3		573	(24.2)	15.4 ±3.0		351	(24.7)	15.5 ±3.0	
3以上	248	(25.6)	15.6 ±3.1		555	(23.5)	15.7 ±3.0		259	(18.2)	15.8 ±2.9	
まとまったお金を貸してもらう												
0	110	(11.4)	13.9 ±4.2	}	304	(12.9)	14.3 ±4.2	}	203	(14.3)	14.3 ±3.8	}
1	659	(68.1)	14.7 ±3.4		1,544	(65.3)	14.9 ±3.3		898	(63.2)	15.0 ±3.3	
2	153	(15.8)	15.0 ±3.3		395	(16.7)	15.4 ±3.1		265	(18.7)	15.6 ±2.9	
3以上	46	(4.8)	16.3 ±2.9		122	(5.2)	15.8 ±2.8		54	(3.8)	16.6 ±2.5	

1) Tukey法による。有意確率を5%とした。

表3 出身環境および中学3年時の学業成績、学歴とSOCとの関連性に関するOLS回帰分析結果

	model1				model2				model3			
	B	(SE)	β	p (B の 95%CI 下限 上限)	B	(SE)	β	p (B の 95%CI 下限 上限)	B	(SE)	β	p (B の 95%CI 下限 上限)
20歳～24歳 (定数)	15.48	(.26)		.000 (14.97 15.98)	16.30	(.29)		.000 (15.73 16.86)	16.48	(.47)		.000 (15.56 17.40)
性別												
男性	-.14	(.22)	-.020	.534 (-.58 .30)	-.17	(.22)	-.025	.430 (-.61 .26)	-.21	(.22)	-.030	.350 (-.65 .23)
女性(ref)	ref.				ref.				ref.			
15歳時の父親の職業												
専門・管理職(ref)	ref.				ref.				ref.			
ホワイトカラー	-.54	(.31)	-.071	.083 (-1.15 .07)	-.23	(.31)	-.031	.448 (-.84 .37)	-.15	(.30)	-.020	.616 (-.75 .44)
ブルーカラー	-.94	(.30)	-.130	.002 (-1.52 -.36)	-.42	(.30)	-.058	.163 (-1.01 .17)	-.25	(.30)	-.035	.397 (-.84 .34)
不在/無職	-.31	(.56)	-.019	.585 (-1.42 .80)	-.58	(.57)	.035	.314 (-.55 1.70)	.57	(.56)	.035	.309 (-.53 1.68)
わからない/欠損	-2.34	(.56)	-.145	.000 (-3.44 -1.24)	-1.55	(.56)	-.096	.006 (-2.65 -.45)	-.93	(.57)	-.057	.101 (-2.04 .18)
15歳時の家庭の経済状況												
豊か/やや豊か(ref)	ref.				ref.				ref.			
ふつう					-.51	(.26)	-.214	.000 (-2.02 -1.00)	-.123	(.26)	-.175	.000 (-1.74 -.72)
やや貧しい/貧しい					-1.98	(.38)	-.194	.000 (-2.73 -1.23)	-1.55	(.38)	-.151	.000 (-2.29 -.80)
わからない/欠損					-3.37	(1.02)	-.108	.001 (-5.37 -1.37)	-2.72	(1.03)	-.087	.008 (-4.73 -.70)
中学3年時の学業成績												
上(ref)									ref.			
やや上									-.40	(.35)	-.048	.252 (-1.07 .28)
真ん中									-1.12	(.34)	-.149	.001 (-1.78 -.45)
やや下									-1.40	(.41)	-.139	.001 (-2.21 -.59)
下									-2.11	(.45)	-.188	.000 (-2.99 -1.22)
わからない/欠損									-2.40	(.73)	-.113	.001 (-3.83 -.96)
学歴(中退・在学中含む)												
高校以下(ref)									ref.			
専修(専門)学校									.46	(.35)	.050	.196 (-.24 1.15)
短大・高専									.50	(.42)	.044	.231 (-.32 1.33)
大学									.52	(.31)	.075	.097 (-.10 1.14)
大学院									1.88	(.73)	.087	.010 (-.45 3.31)
R2乗値			.023				.068				.122	
調整済みR2乗値			.018				.060				.106	
25～34歳 (定数)	15.43	(.17)		.000 (15.08 15.77)	15.91	(.20)		.000 (15.51 16.31)	15.86	(.32)		.000 (15.23 16.48)
性別												
男性	.01	(.14)	.002	.926 (-.26 .29)	.05	(.14)	.007	.737 (-.23 .32)	.11	(.14)	.016	.448 (-.17 .39)
女性(ref)	ref.				ref.				ref.			
15歳時の父親の職業												
専門・管理職(ref)	ref.				ref.				ref.			
ホワイトカラー	-.37	(.21)	-.050	.070 (-.78 .03)	-.29	(.21)	-.038	.168 (-.69 .12)	.00	(.20)	.000	.996 (-.40 .40)
ブルーカラー	-.57	(.19)	-.084	.003 (-.95 -.19)	-.42	(.20)	-.061	.034 (-.80 -.03)	.11	(.20)	.016	.576 (-.28 .50)
不在/無職	-.09	(.40)	-.005	.815 (-.87 .69)	.11	(.41)	.006	.787 (-.70 .92)	.80	(.40)	.045	.046 (-.01 1.59)
わからない/欠損	-1.74	(.35)	-.115	.000 (-2.42 -1.06)	-1.53	(.35)	-.101	.000 (-2.21 -.85)	-.53	(.35)	-.035	.125 (-1.21 .15)
15歳時の家庭の経済状況												
豊か/やや豊か(ref)	ref.				ref.				ref.			
ふつう					-.78	(.18)	-.111	.000 (-1.13 -.43)	-.62	(.17)	-.088	.000 (-.96 -.28)
やや貧しい/貧しい					-.66	(.25)	-.068	.009 (-1.16 -.17)	-.32	(.25)	-.033	.193 (-.81 .16)
わからない/欠損					-1.72	(.63)	-.058	.006 (-2.96 -.48)	-1.22	(.62)	-.041	.051 (-2.44 .00)
中学3年時の学業成績												
上(ref)									ref.			
やや上									-.23	(.23)	-.030	.300 (-.67 .21)
真ん中									-1.15	(.23)	-.159	.000 (-1.60 -.71)
やや下									-1.19	(.26)	-.131	.000 (-1.71 -.68)
下									-2.24	(.31)	-.200	.000 (-2.83 -1.64)
わからない/欠損									-2.72	(.48)	-.128	.000 (-3.66 -1.78)
学歴(中退・在学中含む)												
高校以下(ref)									ref.			
専修(専門)学校									.17	(.20)	.021	.386 (-.22 .56)
短大・高専									.62	(.24)	.061	.011 (-.14 1.09)
大学									.64	(.20)	.089	.002 (-.24 1.04)
大学院									1.44	(.37)	.089	.000 (-.71 2.16)
R2乗値			.012				.022				.092	
調整済みR2乗値			.010				.018				.085	
35～40歳 (定数)	15.63	(.23)		.000 (15.17 16.09)	16.25	(.30)		.000 (15.66 16.83)	15.80	(.43)		.000 (14.96 16.64)
性別												
男性	.31	(.18)	.047	.082 (-.04 .65)	.29	(.18)	.044	.096 (-.05 .64)	.32	(.19)	.048	.093 (-.05 .69)
女性(ref)	ref.				ref.				ref.			
15歳時の父親の職業												
専門・管理職(ref)	ref.				ref.				ref.			
ホワイトカラー	-.89	(.28)	-.120	.001 (-1.44 -.35)	-.79	(.28)	-.106	.005 (-1.33 -.24)	-.54	(.28)	-.073	.051 (-1.08 .00)
ブルーカラー	-.85	(.25)	-.130	.001 (-1.35 -.36)	-.72	(.26)	-.109	.005 (-1.22 -.21)	-.33	(.26)	-.050	.214 (-.84 .19)
不在/無職	-.24	(.45)	-.016	.587 (-1.12 .63)	-.11	(.45)	-.007	.806 (-1.00 .77)	.44	(.45)	.029	.336 (-.45 1.33)
わからない/欠損	-1.36	(.48)	-.083	.005 (-2.31 -.42)	-1.15	(.48)	-.070	.018 (-2.10 -.20)	-.66	(.48)	-.040	.175 (-1.61 .29)
15歳時の家庭の経済状況												
豊か/やや豊か(ref)	ref.				ref.				ref.			
ふつう					-.80	(.26)	-.117	.002 (-1.31 -.30)	-.73	(.26)	-.106	.004 (-1.23 -.23)
やや貧しい/貧しい					-.85	(.31)	-.104	.006 (-1.46 -.24)	-.59	(.31)	-.072	.055 (-1.20 .01)
わからない/欠損					-3.20	(.90)	-.097	.000 (-4.97 -1.43)	-2.52	(.93)	-.077	.007 (-4.34 -.71)
中学3年時の学業成績												
上(ref)									ref.			
やや上									.26	(.30)	.033	.402 (-.34 .85)
真ん中									-.42	(.31)	-.062	.169 (-1.02 .18)
やや下									-.69	(.36)	-.075	.054 (-1.39 .01)
下									-1.37	(.41)	-.119	.001 (-2.17 -.57)
わからない/欠損									-1.49	(.68)	-.065	.030 (-2.83 -.15)
学歴(中退・在学中含む)												
高校以下(ref)									ref.			
専修(専門)学校									.43	(.25)	.051	.084 (-.06 .92)
短大・高専									.72	(.28)	.078	.011 (-.17 1.27)
大学									.63	(.27)	.083	.019 (-.11 1.16)
大学院									.96	(.54)	.052	.074 (-.09 2.02)
R2乗値			.014				.027				.066	
調整済みR2乗値			.011				.022				.054	

表3 出身環境および中学3年時の学業成績、学歴とSOCとの関連性に関するOLS回帰分析結果(続き)

	model4					model5				
	B	(SE)	β	p	B の 95%CI (下限 上限)	B	(SE)	β	p	B の 95%CI (下限 上限)
20歳～24歳 (定数)	16.66	(.61)		.000	(15.46 17.86)	16.83	(.72)		.000	(15.42 18.25)
性別										
男性	.00	(.24)	.000	.997	(-.46 .46)	.15	(.24)	.022	.526	(-.32 .63)
女性(ref)	ref.					ref.				
15歳時の父親の職業										
専門・管理職(ref)	ref.					ref.				
ホワイトカラー	-.12	(.30)	-.015	.702	(-.71 .48)	-.17	(.30)	-.023	.562	(-.76 .41)
ブルーカラー	-.05	(.30)	-.007	.859	(-.65 .54)	-.04	(.30)	-.005	.905	(-.62 .55)
不在/無職	.67	(.56)	.041	.233	(-.43 1.77)	.76	(.55)	.046	.173	(-.33 1.84)
わからない/欠損	-.92	(.56)	-.057	.105	(-2.02 .19)	-.64	(.56)	-.039	.254	(-1.74 .46)
15歳時の家庭の経済状況										
豊か/やや豊か(ref)	ref.					ref.				
ふつう	-.76	(.35)	-.107	.034	(-1.45 -.06)	-.69	(.35)	-.098	.049	(-1.37 .00)
やや貧しい/貧しい	-.67	(.48)	-.066	.162	(-1.61 .27)	-.62	(.47)	-.061	.191	(-1.55 .31)
わからない/欠損	-2.18	(1.05)	-.070	.039	(-4.24 -.11)	-1.61	(1.05)	-.052	.124	(-3.67 .44)
中学3年時の学業成績										
上(ref)	ref.					ref.				
やや上	-.43	(.34)	-.053	.210	(-1.11 .24)	-.52	(.34)	-.063	.126	(-1.19 .15)
真ん中	-1.13	(.34)	-.150	.001	(-1.79 -.47)	-1.19	(.33)	-.158	.000	(-1.84 -.54)
やや下	-1.43	(.41)	-.143	.001	(-2.24 -.63)	-1.59	(.41)	-.158	.000	(-2.38 -.79)
下	-2.01	(.45)	-.179	.000	(-2.89 -1.13)	-2.04	(.44)	-.182	.000	(-2.91 -1.17)
わからない/欠損	-2.52	(.73)	-.118	.001	(-3.95 -1.09)	-2.57	(.72)	-.121	.000	(-3.98 -1.16)
学歴(中退・在学中含む)										
高校以下(ref)	ref.					ref.				
専修(専門)学校	.26	(.38)	.028	.492	(-.48 1.00)	.33	(.38)	.036	.379	(-.41 1.07)
短大・高専	.32	(.44)	.028	.458	(-.53 1.18)	.38	(.43)	.034	.376	(-.47 1.24)
大学	.12	(.37)	.017	.750	(-.60 .84)	.15	(.37)	.021	.693	(-.58 .87)
大学院	1.46	(.77)	.067	.059	(-.06 2.97)	1.58	(.77)	.073	.040	(-.07 3.08)
R2乗値				.150					.197	
調整済みR2乗値				.124					.159	
25～34歳 (定数)	16.51	(.38)		.000	(15.77 17.25)	16.46	(.45)		.000	(15.57 17.35)
性別										
男性	.30	(.17)	.044	.080	(-.04 .63)	.50	(.17)	.074	.004	(.16 .84)
女性(ref)	ref.					ref.				
15歳時の父親の職業										
専門・管理職(ref)	ref.					ref.				
ホワイトカラー	.02	(.20)	.003	.910	(-.37 .42)	.03	(.20)	.004	.867	(-.36 .42)
ブルーカラー	.12	(.20)	.017	.553	(-.27 .50)	.12	(.19)	.018	.539	(-.26 .50)
不在/無職	.88	(.40)	.049	.027	(.10 1.66)	.83	(.39)	.046	.036	(.06 1.60)
わからない/欠損	-.51	(.34)	-.034	.138	(-1.19 .16)	-.43	(.34)	-.029	.205	(-1.11 .24)
15歳時の家庭の経済状況										
豊か/やや豊か(ref)	ref.					ref.				
ふつう	-.36	(.18)	-.051	.052	(-.71 .00)	-.29	(.18)	-.042	.107	(-.65 .06)
やや貧しい/貧しい	.06	(.25)	.006	.810	(-.44 .56)	.18	(.25)	.018	.479	(-.32 .67)
わからない/欠損	-.71	(.62)	-.024	.253	(-1.93 .51)	-.56	(.62)	-.019	.370	(-1.77 .66)
中学3年時の学業成績										
上(ref)	ref.					ref.				
やや上	-.21	(.22)	-.026	.357	(-.64 .23)	-.19	(.22)	-.024	.388	(-.62 .24)
真ん中	-1.05	(.23)	-.145	.000	(-1.49 -.60)	-1.05	(.22)	-.146	.000	(-1.49 -.61)
やや下	-1.05	(.26)	-.116	.000	(-1.57 -.54)	-1.03	(.26)	-.113	.000	(-1.54 -.52)
下	-2.00	(.31)	-.179	.000	(-2.60 -1.40)	-1.95	(.30)	-.174	.000	(-2.54 -1.35)
わからない/欠損	-2.51	(.48)	-.118	.000	(-3.45 -1.58)	-2.29	(.47)	-.108	.000	(-3.22 -1.37)
学歴(中退・在学中含む)										
高校以下(ref)	ref.					ref.				
専修(専門)学校	-.01	(.20)	-.001	.978	(-.40 .39)	-.04	(.20)	-.004	.861	(-.43 .36)
短大・高専	.45	(.24)	.045	.065	(-.03 .93)	.38	(.24)	.038	.117	(-.09 .85)
大学	.40	(.21)	.056	.057	(-.01 .81)	.36	(.21)	.050	.086	(-.05 .77)
大学院	.99	(.40)	.061	.012	(.22 1.77)	.95	(.39)	.058	.016	(.18 1.72)
R2乗値				.117					.144	
調整済みR2乗値				.106					.128	
35～40歳 (定数)	16.61	(.52)		.000	(15.59 17.63)	16.72	(.62)		.000	(15.49 17.94)
性別										
男性	.32	(.24)	.048	.182	(-.15 .78)	.57	(.23)	.086	.016	(.11 1.03)
女性(ref)	ref.					ref.				
15歳時の父親の職業										
専門・管理職(ref)	ref.					ref.				
ホワイトカラー	-.40	(.28)	-.054	.145	(-.94 .14)	-.54	(.27)	-.072	.046	(-1.07 -.01)
ブルーカラー	-.17	(.26)	-.025	.521	(-.68 .34)	-.29	(.26)	-.045	.250	(-.80 .21)
不在/無職	.68	(.45)	.045	.132	(-.21 1.56)	.60	(.44)	.040	.172	(-.26 1.47)
わからない/欠損	-.45	(.48)	-.028	.344	(-1.40 .49)	-.38	(.47)	-.023	.417	(-1.29 .54)
15歳時の家庭の経済状況										
豊か/やや豊か(ref)	ref.					ref.				
ふつう	-.51	(.26)	-.073	.051	(-1.01 .00)	-.43	(.25)	-.062	.091	(-.93 .07)
やや貧しい/貧しい	-.25	(.31)	-.030	.422	(-.86 .36)	-.15	(.30)	-.018	.628	(-.74 .45)
わからない/欠損	-2.27	(.92)	-.069	.013	(-4.07 -.47)	-2.23	(.90)	-.068	.013	(-4.00 -.47)
中学3年時の学業成績										
上(ref)	ref.					ref.				
やや上	.32	(.30)	.041	.294	(-.27 .91)	.24	(.29)	.031	.406	(-.33 .82)
真ん中	-.30	(.30)	-.044	.320	(-.90 .29)	-.38	(.30)	-.055	.204	(-.96 .20)
やや下	-.50	(.35)	-.055	.155	(-1.20 .19)	-.49	(.34)	-.053	.159	(-1.16 .19)
下	-1.22	(.40)	-.107	.003	(-2.02 -.43)	-1.21	(.40)	-.105	.002	(-1.99 -.43)
わからない/欠損	-1.35	(.68)	-.059	.046	(-2.68 -.02)	-1.11	(.66)	-.048	.095	(-2.41 .19)
学歴(中退・在学中含む)										
高校以下(ref)	ref.					ref.				
専修(専門)学校	.31	(.25)	.037	.212	(-.18 .81)	.28	(.25)	.033	.245	(-.20 .77)
短大・高専	.56	(.28)	.061	.046	(.01 1.10)	.54	(.27)	.059	.047	(-.01 1.08)
大学	.43	(.27)	.057	.115	(-.11 .97)	.36	(.27)	.048	.173	(-.16 .89)
大学院	.58	(.55)	.032	.288	(-.49 1.66)	.44	(.54)	.024	.415	(-.62 1.49)
R2乗値				.101					.154	
調整済みR2乗値				.083					.128	

model4:model3+職業+現在の経済的状況を投入したモデル
model5:model4+サポートネットワークを投入したモデル

表4 現在の職業および豊かさの自己評価とSOCとの関連性に関するOLS回帰分析結果

	model1				model2				model3								
	B	(SE)	β	p	B	(SE)	β	p	B	(SE)	β	p					
20～24歳																	
現在の職業と雇用形態																	
正規・専門/技術(ref)	ref.				ref.				ref.								
非正規・専門/技術	.29	(.83)	.012	.724	(-1.33 1.92)	.27	(.82)	.011	.747	(-1.35 1.88)	.46	(.82)	.019	.569	(-1.14 2.07)		
管理/自営	-1.12	(1.00)	-.038	.262	(-3.09 .84)	-1.27	(1.00)	-.042	.203	(-3.22 .68)	-1.04	(.98)	-.035	.291	(-2.97 .89)		
正規・ホワイトカラー	-.04	(.46)	-.004	.937	(-.94 .87)	.05	(.46)	.005	.916	(-.85 .95)	.12	(.45)	.012	.797	(-.77 1.01)		
非正規・ホワイトカラー	-.02	(.50)	-.001	.976	(-.99 .96)	.07	(.49)	.006	.893	(-.90 1.04)	.20	(.49)	.018	.685	(-.76 1.16)		
正規・ブルーカラー	-.19	(.54)	-.016	.728	(-1.24 .87)	-.21	(.54)	-.018	.701	(-1.26 .84)	.15	(.53)	.013	.779	(-.89 1.19)		
非正規・ブルーカラー	-1.22	(.65)	-.075	.059	(-2.49 .05)	-.94	(.65)	-.057	.146	(-2.21 .33)	-.75	(.64)	-.046	.245	(-2.00 .51)		
専業主婦(夫)	-2.25	(.76)	-.106	.003	(-3.74 -.77)	-2.10	(.75)	-.099	.005	(-3.58 -.62)	-1.63	(.75)	-.076	.031	(-3.10 -.15)		
無業	.82	(.79)	.037	.298	(-.73 2.37)	.14	(.92)	.006	.882	(-1.67 1.95)	.77	(.78)	.035	.325	(-.76 2.30)		
学生	.17	(.43)	.024	.692	(-.67 1.01)	.30	(.43)	.043	.477	(-.53 1.14)	.33	(.42)	.046	.441	(-.50 1.15)		
現在の経済的状况																	
豊か/やや豊か(ref)					ref.												
ふつう					-.48	(.35)	-.069	.166	(-1.16 .20)				-.41	(.34)	-.059	.227	(-1.09 .26)
貧しい/やや貧しい					-1.49	(.45)	-.159	.001	(-2.38 -.60)				-1.19	(.45)	-.127	.008	(-2.07 -.31)
R2乗値			.140				.150					.190					
調整済みR2乗値			.116				.124					.154					
25～34歳																	
現在の職業と雇用形態																	
正規・専門/技術(ref)	ref.				ref.				ref.								
非正規・専門/技術	.38	(.41)	.020	.358	(-.43 1.18)	.56	(.41)	.030	.170	(-.24 1.36)	.46	(.40)	.024	.258	(-.34 1.25)		
管理/自営	.53	(.37)	.033	.154	(-.20 1.26)	.45	(.37)	.028	.217	(-.27 1.18)	.35	(.37)	.022	.337	(-.37 1.07)		
正規・ホワイトカラー	-.33	(.23)	-.043	.146	(-.78 .12)	-.26	(.23)	-.034	.246	(-.71 .18)	-.26	(.23)	-.034	.252	(-.70 .18)		
非正規・ホワイトカラー	-.75	(.28)	-.070	.008	(-1.29 -.20)	-.53	(.28)	-.050	.061	(-1.08 .02)	-.55	(.28)	-.051	.050	(-1.09 .00)		
正規・ブルーカラー	-.65	(.27)	-.071	.017	(-1.19 -.12)	-.65	(.27)	-.071	.017	(-1.18 -.12)	-.58	(.27)	-.063	.030	(-1.11 -.06)		
非正規・ブルーカラー	-.67	(.35)	-.045	.056	(-1.37 .02)	-.53	(.35)	-.036	.132	(-1.22 .16)	-.51	(.35)	-.034	.143	(-1.19 .17)		
専業主婦(夫)	-1.33	(.41)	-.074	.001	(-2.13 -.54)	-1.06	(.41)	-.059	.009	(-1.85 -.26)	-1.07	(.40)	-.060	.008	(-1.86 -.28)		
無業	-.05	(.28)	-.005	.862	(-.60 .50)	-.21	(.29)	-.020	.481	(-.79 .37)	.09	(.28)	.009	.740	(-.45 .64)		
学生	-.44	(.53)	-.018	.408	(-1.48 .60)	-.26	(.53)	-.011	.621	(-1.30 .78)	-.54	(.52)	-.022	.302	(-1.57 .49)		
現在の経済的状况																	
豊か/やや豊か(ref)					ref.								ref.				
ふつう					-.66	(.19)	-.095	.000	(-1.03 -.29)				-.66	(.19)	-.095	.000	(-1.03 -.29)
貧しい/やや貧しい					-1.33	(.24)	-.152	.000	(-1.79 -.86)				-1.28	(.24)	-.146	.000	(-1.74 -.82)
R2乗値			.105				.117					.140					
調整済みR2乗値			.094				.106					.124					
35～40歳																	
現在の職業と雇用形態																	
正規・専門/技術(ref)	ref.				ref.				ref.								
非正規・専門/技術	.31	(.54)	.017	.563	(-.75 1.37)	.50	(.54)	.028	.352	(-.55 1.55)	.45	(.53)	.025	.392	(-.58 1.48)		
管理/自営	.47	(.39)	.040	.236	(-.30 1.23)	.35	(.39)	.030	.373	(-.42 1.11)	.20	(.38)	.017	.605	(-.55 .94)		
正規・ホワイトカラー	-.40	(.31)	-.052	.202	(-1.01 .21)	-.27	(.31)	-.036	.379	(-.88 .34)	-.37	(.30)	-.048	.226	(-.96 .23)		
非正規・ホワイトカラー	-.36	(.39)	-.036	.350	(-1.12 .40)	-.14	(.38)	-.014	.708	(-.90 .61)	-.27	(.37)	-.027	.470	(-1.01 .46)		
正規・ブルーカラー	-.42	(.37)	-.044	.249	(-1.14 .30)	-.29	(.36)	-.031	.417	(-1.00 .42)	-.29	(.35)	-.030	.412	(-.98 .40)		
非正規・ブルーカラー	-.87	(.44)	-.066	.050	(-1.73 .00)	-.65	(.44)	-.050	.136	(-1.51 .21)	-.66	(.43)	-.050	.122	(-1.50 .18)		
専業主婦(夫)	-1.34	(.57)	-.069	.018	(-2.45 -.23)	-.91	(.57)	-.047	.112	(-2.04 .21)	-1.02	(.55)	-.053	.062	(-2.09 .05)		
無業	-.32	(.38)	-.035	.389	(-1.06 .41)	-.34	(.38)	-.037	.364	(-1.08 .40)	-.47	(.36)	-.050	.198	(-1.18 .24)		
現在の経済的状况																	
豊か/やや豊か(ref)					ref.								ref.				
ふつう					-.99	(.24)	-.147	.000	(-1.46 -.53)				-1.14	(.23)	-.168	.000	(-1.59 -.68)
貧しい/やや貧しい					-1.71	(.30)	-.205	.000	(-2.29 -1.13)				-1.63	(.29)	-.196	.000	(-2.19 -1.06)
R2乗値			.078				.101					.154					
調整済みR2乗値			.061				.083					.129					

model1,2:性、15歳時の父親の職業、15歳時の家庭の経済的状况、中学3年時の学業成績、学歴でコントロールしている

model3:性、15歳時の父親の職業、15歳時の家庭の経済的状况、中学3年時の学業成績、学歴、サポートネットワークでコントロールしている

表5 婚姻状況と子どもの有無およびサポートネットワークとSOCとの関連性に関するOLS回帰分析結果¹⁾

	B	(SE)	β	p	Bの95%CI (下限 上限)	
20～24歳						
仕事や勉強の相談						
0	-.34	(.60)	-.020	.575	(-1.52	.85)
1	-.65	(.31)	-.091	.036	(-1.26	-.04)
2	-.34	(.31)	-.042	.270	(-.95	.27)
3以上(ref)	ref.					
仕事を紹介してもらう						
0(ref)	ref.					
1	.48	(.25)	.067	.060	(-.02	.98)
2	.03	(.35)	.003	.941	(-.66	.71)
3以上	.88	(.43)	.073	.040	(.04	1.73)
人間関係の相談						
0	-1.63	(.52)	-.130	.002	(-2.66	-.61)
1	-.58	(.32)	-.082	.074	(-1.22	.06)
2	-.36	(.32)	-.044	.266	(-.98	.27)
3以上(ref)	ref.					
まとまったお金を貸してもらう						
0(ref)	ref.					
1	-.22	(.38)	-.029	.563	(-.96	.52)
2	-.28	(.46)	-.030	.539	(-1.18	.62)
3以上	.53	(.63)	.033	.397	(-.70	1.76)
R2乗値				.194		
調整済みR2乗値				.154		
25～34歳						
仕事や勉強の相談						
0	-.62	(.38)	-.041	.100	(-1.36	.12)
1	-.54	(.20)	-.080	.006	(-.94	-.15)
2	-.33	(.20)	-.042	.094	(-.72	.06)
3以上(ref)	ref.					
仕事を紹介してもらう						
0(ref)	ref.					
1	.34	(.16)	.050	.027	(.04	.65)
2	.25	(.22)	.026	.251	(-.18	.67)
3以上	.52	(.29)	.040	.069	(-.04	1.09)
人間関係の相談						
0	-.62	(.31)	-.055	.049	(-1.23	.00)
1	-.51	(.21)	-.074	.015	(-.92	-.10)
2	-.03	(.20)	-.003	.894	(-.42	.37)
3以上(ref)	ref.					
まとまったお金を貸してもらう						
0(ref)	ref.					
1	.08	(.22)	.012	.705	(-.34	.51)
2	.27	(.26)	.030	.303	(-.25	.79)
3以上	.50	(.37)	.032	.178	(-.23	1.22)
R2乗値				.140		
調整済みR2乗値				.124		
35～40歳						
仕事や勉強の相談						
0	-.77	(.45)	-.057	.090	(-1.65	.12)
1	-.44	(.27)	-.066	.106	(-.97	.09)
2	-.29	(.27)	-.039	.270	(-.82	.23)
3以上(ref)	ref.					
仕事を紹介してもらう						
0(ref)	ref.					
1	.33	(.20)	.050	.095	(-.06	.73)
2	.47	(.29)	.048	.104	(-.10	1.04)
3以上	.52	(.35)	.043	.144	(-.18	1.21)
人間関係の相談						
0	-1.38	(.39)	-.130	.000	(-2.15	-.62)
1	-.52	(.27)	-.079	.056	(-1.06	.01)
2	.11	(.27)	.015	.680	(-.42	.64)
3以上(ref)	ref.					
まとまったお金を貸してもらう						
0(ref)	ref.					
1	.37	(.25)	.054	.147	(-.13	.87)
2	.59	(.31)	.071	.058	(-.02	1.21)
3以上	1.49	(.50)	.087	.003	(.50	2.48)
R2乗値				.154		
調整済みR2乗値				.129		

1) 性、15歳時の父親の職業、15歳時の経済的状況、中学3年時の学業成績、学歴、現在の職業、現在の経済的状況をコントロールしている

(2) 出身環境および学業上の成功、学歴と SOC との関連性(表 3)

15 歳時の父親の職業に関して、20~24 歳の世代では、「専門・管理職」に比して「ブルーカラー職」の層で低い SOC との関連が見られたが、15 歳時の家庭の経済的状況を投入すると(model2) 関連性が見られなくなった。15 歳時の父親の職業が特に「ブルーカラー職」である場合、15 歳時の経済的状況を介して SOC に関連している可能性がうかがわれた。他方で、15 歳時の父親の職業が「専門・管理職」に比して 25~34 歳の世代では「ブルーカラー職」であること、35~40 歳の世代では、「ホワイトカラー職」、「ブルーカラー職」双方で、15 歳時の家庭の経済的状況によらずに SOC に関連を示していた。しかし、学業成績、および学歴を投入することで関連性が見られなくなり、学業成績あるいは学歴を介して SOC に関連している可能性がうかがわれた。

15 歳時の家庭の経済的状況に関しては、どの世代においても model2 では豊か/やや豊かと回答した群に比べて、ふつう、貧しい/やや貧しいと回答した群で有意に低い SOC であることと関連が見られた。しかし、学業成績および学歴を投入した model3 においては、20~24 歳の世代ではそれら学業関係の変数によらずにどの群も低い SOC であることが示されたが、25~34 歳、40~34 歳の世代では「貧しい/やや貧しい」群と「豊か/やや豊か」群とは関連が見られなくなり、学業成績あるいは学歴を介して SOC に関連している可能性が示唆された。他方で「ふつう」群は学歴、成績によらずに「豊か/やや豊か」と回答した群に比して低い SOC であることと関連を示していた。「ふつう」群は世代によらず、model4 においても職業、現在の経済的状況によらずに「豊か/やや豊か」群よりも低い SOC と関連がみられ、model5 で関連性が見えなくなることから、サポートネットワークを介して SOC に関連している可能性がうかがわれた。

中学 3 年時の学業成績に関して、20~24 歳の世代と 25~34 歳の世代とでは「上」と回答した群に比較して「真ん中」「やや下」「下」の各群で、その後の学歴によらず下に行くほど低い SOC であることが示された。これは、現在の職業、経済的状況、サポートネットワークによらずに model5 においても同様の関連性を示していた。35~40 歳代はその後の学歴をコントロールした状態では「上」に比して「やや上」「真ん中」「やや下」は有意な関連は見られなかったが、「下」の群において低い SOC であることが示された。また、この関係は、現在の職業、経済的状況、サポートネットワークによらずに model5 においても同様の関連性が示された。

学歴に関しては 20~24 歳の世代で「大学院」と回答した群は、「高校以下」よりも高い SOC で、サポートネットワークにもよらず関連性を見せていた。25~34 歳の世代では、高校以下の群に比して、「短大・高専」「大学」「大学院」の群で有意あるいは有意傾向の関連性を示しており、現在の職業、経済的状況を投入すると関連性は弱まるが(model4)、職業、経済的状況によらずに引き続き独自の効果を示していた。サポートネットワークを投入し

でも大きく関連性は変わらないことから(model5)、この世代における学歴は、一部は直接に SOC に関連し、また職業あるいは現在の経済的状況を介して間接的に影響をしている可能性がうかがわれた。25~34 歳の群においては、高校以下の群に比べて「専修学校」、「短大・高専」、「大学」、「大学院」において高い SOC と有意あるいは有意傾向の関連性がみられたが、現在の職業、および経済的状況を投入することで「短大・高専」以外の関連性がなくなり(model4)、またサポートネットワークを投入しても同様の関連性にとどまった(model5)。「短大・高専」以外の学歴に関しては現在の職業あるいは経済的状況を介して SOC に関連している可能性がうかがわれた。

(3) 現在の職業および豊かさの自己評価と SOC との関連性(表 4)

20~24 歳の世代では、「正規・専門技術職」群に比して、「非正規・ブルーカラー職」および「専業主婦(夫)」群で、前者は有意傾向の、後者は有意に低い SOC であることが示された。model2 で現在の経済的状況を投入することで「非正規・ブルーカラー職」群の関連性がなくなることから、この世代において「非正規・ブルーカラー職」であると、現在の経済的状況を介して SOC に関連する可能性がうかがわれた。他方「専業主婦(夫)」では、現在の豊かさを投入しても関連性は変化せず(model2)、サポートネットワークを投入するとやや関連性が減少するものの有意な関連性は示されていた。したがって、「専業主婦(夫)」であることと低い SOC との関連性は直接の関係と、サポートネットワークを介しての間接的な関係の両者が存在する可能性がうかがわれた。

25~34 歳の世代では「正規・専門技術職」群に比して、「非正規ホワイトカラー職」「正規・ブルーカラー職」「専業主婦(夫)」群で低い SOC が、「非正規・ブルーカラー職」において有意傾向で低い SOC との関連が見られた。しかし、「現在の経済的状況」を投入することで「非正規ホワイトカラー職」は関連性が弱まり、「非正規・ブルーカラー職」は関連性が消失した。その一方で「正規・ブルーカラー職」と「専業主婦(夫)」における関連性は不変であった(model2)。さらにサポートネットワークを投入すると、「非正規ホワイトカラー職」「専業主婦(夫)」の関連性は不変で、「正規・ブルーカラー職」においては関連性が弱まった(model3)。したがって、「非正規・ブルーカラー職」は、現在の経済的状況を介して SOC に関連し、「非正規ホワイトカラー職」は現在の経済的状況を介した間接的な SOC との関連性と、直接の SOC との関連性を有していることがうかがわれた。また、「正規・ブルーカラー職」は現在の経済的状況ではなくサポートネットワークを介して SOC に関連する間接的な関連性と、直接の関連性の双方の関係があることがうかがわれた。「専業主婦(夫)」は、現在の経済的状況およびサポートネットワークによらず、「正規・専門技術職」よりも低い SOC であることが示された。

35~40 歳の世代では「非正規・ブルーカラー職」および「専業主婦(夫)」において「正規・

専門技術職」に比して低い SOC であることと有意な関連が見られているが、「現在の経済的状况」を投入することにより関連性がなくなった。したがって両者ともに現在の経済状態を介して SOC と関連している可能性がうかがわれた。

また、いずれの世代においても、「無業」者は「正規・専門技術職」との間には SOC に有意な差がみられなかった。

20~24 歳代においては「豊か/やや豊か」と「やや貧しい/貧しい」との間に有意な差が見られ、「やや貧しい/貧しい」ほど低い SOC であることが示された。「ふつう」とは差が見られなかった。この関係は、サポートネットワークを投入しても不変で(model3)、サポートネットワークによらず関連性を持つことが示された。

25~34 歳代、35~40 歳代においては、「豊か/やや豊か」の群に比べて、「ふつう」「貧しい/やや貧しい」群では有意に低い SOC と関連することが示された。これは、サポートネットワークを投入しても不変であり(model3)、サポートネットワークによらず関連性を持つことが示された。

(4) サポートネットワークと SOC との関連性(表 5)

20~24 歳代において、「仕事や勉強の相談相手」に関して、3 カテゴリ以上にわたると回答した群と比して1カテゴリのみの群で低い SOC となることが示された。全くないとした群においては大きな差が見られなかった。「仕事を紹介してくれる人」に関してはまったくないと回答した群に比べて3以上のカテゴリをあげた群において有意に高い SOC が見られていることが示された。「人間関係の相談相手」に関しては、3 カテゴリ以上と回答した群に比してまったくないと回答した群で有意に低い SOC であることが示された。「まとまったお金を貸してくれる人」に関してはどのカテゴリにおいても有意な違いは見られなかった。

25~34 歳代の群で「仕事や勉強の相談相手」に関しては、3 カテゴリ以上にわたると回答した群に比して、カテゴリ数が減るごとに低い SOC であることが示されたが、全くない群との間では統計学的に有意な関連性は見られなかった。「仕事を紹介してくれる人」に関しては、全くない群に比べて1カテゴリおよび3カテゴリ以上を回答した群で SOC スコアが有意に高いことが示されたが、2 カテゴリをあげた群では全くない群と比して大きな差が見られなかった。「人間関係の相談相手」では3以上のカテゴリと回答した群と比較して2カテゴリと回答した群では有意な関連が見られなかったが、1カテゴリおよび全くないとした各群では有意な関連が示された。「まとまったお金を貸してもらおう人」に関しては20~24 歳代と同様に各群において統計学的に有意な関連性は見られなかった。

35~40 歳では、「仕事や勉強の相談相手」および「仕事を紹介してもらおう人」において、各群において有意な関連性は示されなかった。しかし、カテゴリが増えるごとにやや高い

SOCであることがうかがわれた。他方で「人間関係の相談」に関しては、3以上と回答した群と比較し、全くない群では有意な関連性が見られるほか、1カテゴリのみの群とも有意傾向の関連性が生じていた。「まとまったお金を貸してもらおう人」に関しては、20~24歳代、25~34歳代とは異なり全くないとする群に比して、2カテゴリでは有意傾向の関連性が、3カテゴリ以上の群では有意な関連性が出ており、カテゴリが多いほど高いSOCであることがうかがわれた。

4. 考察

本研究におけるリサーチクエスションとしては、第一に思春期における生育環境、学業上の成功体験としての成績とその後の学歴とがどのようにその後のSOCを規定しているのか、第二に、現在の職業、経済的状况によりどのように現在のSOCが規定されているのか、第三に支援機能別にソーシャルネットワークは現在のSOCとどのように関連しているか、の3点を掲げていた。以下、これら3点について考察をしていく。

(1) 思春期における生育環境、学校における成功体験、学歴とSOC

思春期における生育環境、学校における成功体験とその後の学歴とがどのようにその後のSOCを規定しているのかに関しては、以下四点に関して明らかになったと言える。

第一に、思春期における家庭の経済的状况が豊かであったこと、学校における成功体験があったことは、その後の学歴、職業、現在のサポートネットワークによらず、直接現在のSOCとの関連性を持っていた点である。まず、思春期における経済的に恵まれた家庭での生活がその後のSOCを規定するという結果に関しては本研究における仮説を支持する結果であったと言える。また、直接効果を持つという点については、フィンランドにおける先行研究の結果(Volonen et al. 2004; Feldt et al. 2005; Volonen et al. 2006)を支持しており、わが国においても同様にこの関連性が明らかになったといえる。

他方、思春期の学校における成功体験としての良好な主観的学業成績が、学歴やその後の職業、経済的状况によらずに直接現在のSOCとの関連をもつ点に関しては、客観的な学力テスト得点である学業成績がその後の学歴、職業を介してSOCに関連するとした媒介効果を示したフィンランドの先行研究(Feldt et al. 2005)とは異なり、わが国の大学生における主観的な学業上の成功経験との関連性を検討した結果とは同様の結果(木村ほか2001)となった。その後の学歴や職業によらない直接効果が見られたという点で、本研究における仮説、すなわち思春期における成功体験としての良好な学業成績は成人後のSOCに直接寄与する人生経験であることを支持していたといえる。しかしながら Feldt et al.

(2005)の結果と異なり、その後の学歴や職業によらずに直接効果がみられていることに関しては、以下の二点はその理由として考えられる。まず一点目としては、日本国内における学校成績は、フィンランドにおけるそれよりも、人生経験として重要な意味をもつ可能性があるという点である。この点については今後両国の中等教育の内容を踏まえた上での慎重な検討が必要であると考えられる。もう一点としては、測定方法の問題であり、Feldt et al. (2005)が客観的な学力テスト得点を使用している一方で、本研究および木村ほか(2001)の研究は振り返りによる自己評価であり、振り返りによるリコールバイアスが影響している可能性も考えられる。

第二に、父親の職業、15歳時の家庭の経済的状況は、現在のSOCに対して直接の関連性は持たず学業成績あるいは学歴を介して間接的に影響し、また、そのメカニズムは世代によって異なっていた点である。少なくとも間接効果を有していた点では本研究における仮説を支持していた。いずれの世代によらず父親の職業は、その後の学歴および職業を介して現在のSOCに対し、間接的に影響するという結果に関しては、Lundberg (1997)およびFeldt et al. (2005)の結果と同様であった。Feldt et al. (2005)は、直接効果が出なかった理由として調査国であるフィンランドが北欧諸国のなかでも社会経済的格差の低い国である点を理由として挙げているが、Lundberg (1997)は、SOCの形成要因はAntonovskyが仮定している乳幼児期より思春期における家庭の社会経済的環境要因に特化されるのではなく、それ以降の職業や人生経験によりSOCが変動していく可能性が理論的にも十分に考えられ、その点を反映している可能性があるとして述べている。Antonovsky自身は思春期における経験がSOCの形成において極めて重要な経験であると定義している。しかしその後、職業をはじめとするGRRsにより提供される人生経験によってSOCが左右される可能性(Antonovsky 1987 pp138-141)や、SOCの下位因子である有意味感の高低が、他の二つの下位因子の上昇、下降に影響を及ぼす形でSOCの変動につながる点についても論じていることから(Antonovsky 1987 pp24-27)、本研究においてもLundberg(1997)の説を支持できるものと考えられる。

第三に、学歴は基本的には職業、現在の経済的状況を介してSOCに影響する間接的な関連性のみを有し、20~24歳および25~34歳の世代の大学院生のみがSOCに対する直接の関連性を持つ点である。これは本研究の仮説3を支持していたといえる。学歴とSOCとの検討を報告している論文の中で、その後の職業を制御している研究は、SOCへの直接効果を示した研究(Grøholt et al. 2003)と、職業を媒介しての間接効果を示した研究(Feldt et al. 2005)の二つがあり、直接効果が生じなかったことについてFeldt et al. (2005)はフィンランドは北欧諸国の中でももっとも教育機会が平等である国であると述べており、高

い学歴をもつことが GRRs として大きな位置を占めるとは考えにくい点について言及している。わが国においては大学等進学率¹⁶が上昇傾向にある一方で、企業等においても高学歴を持つことが必ずしも高い報酬とは結びついていない実態もある（荻谷 2001 pp133-139）。したがって、Feldt et al. (2005)の指摘と同様にわが国においても長い教育年数をもつことが有力な GRRs であるとは言いがたい状況であることが考えられ、今回の検討においては SOC の直接の規定要因として浮上しなかったことが考えられる。ただし、34 歳以下において大学院卒(在学中含む)のみが高い SOC との直接の関連性を持っていた。この関連性に関する先行研究はみられておらず、今後、在学中と卒後の違い、或いは専攻や就職状況といった大学院生活の詳細も含めた検討が必要であろう。

最後に、父親が不在または無職であることは世代を問わず、専門・管理職の群と変わらない一定水準の SOC のレベルを規定している点である。父親が不在、または無職であることは SOC 形成に関する仮説から考えると、SOC を育む上で有効な人生経験を受領しにくい環境であることが考えられるが、本研究の結果ではどの世代においても間接的な関連性も出現しなかった。これは、SOC の形成に関するもう 1 つのルートであるストレスフルなイベントや慢性的にストレッサーに遭遇しながらも、成功的な対処に終わることによって、SOC 自体の強化につながるという仮説によって説明ができる可能性がある。思春期に父親が不在または無職であったことは慢性的なストレッサーであり、このストレッサーへの対処に成功し、ある程度の SOC の水準を得ている可能性がある。ただし、本研究における分析対象者においてこのような対処の成功を見た人が多かったという可能性も十分に考えられるため、一般化に関しては慎重である必要がある。この結果に関しては今後父親が不在または無職である人のライフコースを含めた詳細な検討が必要であろう。

(2) 現在の職業、経済的状況と SOC

現在の職業、経済的状況によりどのように現在の SOC が規定されているのか、というリサーチクエスチョンに関しては、以下の四点が明らかになったといえる。

まず、非正規雇用のブルーカラー職であることは、世代によらず、また、思春期の社会的・経済的な状況、学歴によらず低い SOC を規定しており、現在の経済的状況を介した間接的な関連性を持っていた点である。ブルーカラー職であることが低い SOC につながるという先行研究がみられており (Lundberg 1997; Volanen et al. 2004; Smith et al. 2003; Nilsson et al. 2003)、特に非正規雇用におけるブルーカラー職において低い SOC である

¹⁶ 文部科学省の学校基本調査において計量される、18 歳人口における大学・短期大学進学者、高等専門学校第四年次在学者の割合

ことが明らかとなった。また、いずれの世代においても現在の経済的状況を介して SOC に関連を示しており、この層における経済的な困難さが影響していることがうかがわれた。非正規雇用者においては低い健康状態であることが(堤 2006; Kivimäki et al. 2003; Virtanen et al. 2005) 報告されているが、今後この非正規雇用者のうちでも特にブルーカラー層において、低い SOC であることによる様々な健康上の問題や適応上の問題等の発生が懸念され、この層に対する詳細な検討が必要であることが考えられた。

第二に、主婦(夫)において各世代とも低い SOC であるという直接的、間接的な関連性が見られ、そのメカニズムは世代により異なる点である。この結果は本研究における仮説に反する結果であった。具体的なメカニズムとしては 20~24 歳においては直接効果とサポートネットワークの媒介効果の両者、25~34 歳においては直接効果のみを有し、35~40 歳においては直接効果と経済的状況の媒介効果の両者が見られた。主婦は他の職業や雇用形態と比して低い SOC を有しているという報告は見られておらず、定年退職者と学生に主婦も含めた群が雇用者と比して SOC の水準が変わらないとする報告(Volonen et al. 2006)にとどまる。

この結果は、女性であることも含め主婦役割が社会的に低く評価されている社会においては強い SOC を提供するには不十分な人生経験しか享受できないという Antonovsky の仮説を支持するものであったことが考えられる。また、20~24 歳代におけるサポートネットワークを介しての SOC への間接効果の可能性に関しては、この世代の専業主婦層におけるサポートネットワークの希薄さが関与し、35~40 歳代においては専業主婦の家庭は経済的に十分に豊かではないことが関与している可能性がうかがわれる。したがって、主婦層における世代別の SOC 形成のメカニズムの解明とその支援のための介入方策に関する今後一層の研究の蓄積が必要であることが考えられる。

第三に、25~34 歳の世代において、正規雇用の専門・技術職と比較して、非正規雇用のブルーカラー職や主婦(夫)に加えて、非正規雇用のホワイトカラー職と正規雇用のブルーカラー職においても低い SOC が規定されていることがわかった。さらに、非正規雇用のブルーカラー職は、現在の経済的状況を介して SOC に関連することに対し、非正規雇用のホワイトカラー職は、現在の経済的状況を介して SOC に関連する間接効果、及び経済的状況にはよらない直接効果の両者が示され、正規雇用のブルーカラー職は現在の経済的状況によらずに直接 SOC に関連していたという点である。

正規雇用のブルーカラー職や非正規雇用のホワイトカラー職において、直接低い SOC が規定されたことに関しては以下の理由が考えられる。すなわち、職業人としての主体性が確立し、職務上の責任が高まる「キャリア前期」にあるにもかかわらず、不安定で職務

上の責任が低い非正規雇用形態における人生経験や、専門技術職に比して社会的な意味をもつ意思決定や複雑な職務が課せられていると感じる機会が少ないと考えられるブルーカラー職としての人生経験を享受せざるを得ないため、SOC 形成が阻害されている可能性がある点である。しかし、この点は、他の年代、特に 35~40 歳代においてもあてはまる理由とも考えられる。したがって、加えて、この世代は、就職率低迷期に就職期が重なり首尾よく就職することが極めて困難な中での就職をせざるを得ないことで、他世代よりも SOC の格差が広がっている可能性がある、すなわち、本研究の仮説を支持する結果となったものと考えられる。

正規雇用のブルーカラー職者が現在の経済的状況を介さない直接効果のみが示され、非正規雇用のブルーカラー職者は現在の経済的状況を介した間接効果のみが示されたが、非正規雇用のホワイトカラー職者では直接効果と経済的状況を介する間接効果の両者が示されたことについては、非正規雇用のホワイトカラー職においては SOC に影響する職務上の問題と経済的な問題の両者が並存している可能性がうかがわれ、今後職種別の職場環境も含めた詳細な検討が必要であると考えられた。

第四に、世代を問わず現在の経済的に豊かであることは現在良好な SOC であり、経済的に貧しいことは低い SOC と関連する点である。本研究では現在の主観的な経済的状況との関連であるが、世帯収入(Smith et al. 2003)および一人当たりの等価所得(吉井 2006)との SOC の関連性に関する先行研究で同様の結果と考えられ、現在の経済的状況は SOC を規定する要因であるとする本研究の仮説 7 を支持するものと考えられる。

(3) 機能別サポートネットワーク

サポートネットワークと SOC との関連において、単変量解析の結果においては概ね仮説 8 を支持していることが伺えたが、多変量解析の結果では、サポート機能別に以下の 4 点の異なる振る舞いが示された。

第一に、世代によらず人間関係における相談相手の範囲が少ないほど低い SOC であることについて、主に人間関係における相談相手とは情緒的サポートに近い概念と考えると、先行研究における結果(Wolff & Ratner 1999; Holmberg et al. 2004)を支持しており、情緒的サポートネットワークのサイズは世代によらず有力な GRRs である可能性が考えられる。

第二に、20~24 歳の世代では仕事や勉強の相談相手の範囲と SOC とは関連が見られないうが、それ以降の世代では範囲が狭いほど低い SOC となっている点である。25 歳以降に関しては本研究の仮説 8 を支持していると考えられる。20~24 歳の世代において関連性が見られなかった点については今後詳細な検討が必要であるが、20~24 歳代比べて 25 歳以

降の世代となると、仕事は生活・人生における重要性が高くなり、仕事に関する相談相手の有無は GRRs として重要な位置であったことがその理由として考えられる。

第三に、仕事を紹介してくれるものと考えられる人の範囲と SOC との間には多変量解析の結果では大きくは関連が見られなかった点である。また、結果には示していないが、雇用形態との交互作用効果は生じておらず、雇用形態別に検討した場合でも大きく SOC に差が出なかった。この点についても今後引き続き再現性も含めた詳細な検討が必要である。

第四に、35 歳以上の群のみで、まとまったお金を貸してもらえると見込まれる人の範囲が広いほど SOC が高いという関連性が見られたという点である。35 歳以上の群においては本研究の仮説 8 が支持されたものと考えられる。金銭的な側面に限らず、手段的サポートの受領と SOC との関係は複数の研究でその関連性が報告されており(Wolff & Ratner 1999; Volanen et al. 2004; Krantz & Östergren 2004)、今回の結果はさらに金銭面に特化した場合においても大きく SOC と関連性が見られることを示しているものと考えられる。ただし、35 歳未満の群では関連が見られなかったことに関して、今後再現性の検討が必要である。

ただし本研究におけるいずれの結果も、また Smith et al. (2003)以外の先行研究と同様に、サポートネットワークと SOC との横断的な関連性の検討にとどまっている。したがって因果関係を検証すべく、縦断研究における再現性の検討も必要である。

4. 結論

本研究においては、新たに開発した 3 項目版 SOC スケール(SOC3-UTHS)を用いて、ストレス対処能力 SOC の形成に関するモデルを探索することを目的に、20~40 歳の成人男女を対象として検討を行ったところ、以下の知見が得られた。すなわち、思春期における家庭の経済的状況が豊かであったこと、学校における成功体験があったことは、その後の学歴、職業、現在のサポートネットワークによらず、直接現在の SOC との関連性を持っていた。また、父親の職業、家庭が経済的に貧しかったことは、現在の SOC に対して直接の関連性は持たず学業成績あるいは学歴を介して間接的に影響していた。他方で学歴は基本的には職業、現在の経済的状況を介して SOC に影響する間接的な関連性のみを有していた。ただし、父親が不在または無職であることは世代を問わず、現在、専門・管理職の群と変わらない一定水準の SOC のレベルを規定していることが明らかとなった。

職業と SOC の関係については、非正規雇用のブルーカラー職であることは、世代によらず、また、思春期の社会経済的な状況、学歴によらず正規雇用の専門・技術職よりも低い SOC が規定され、現在の経済的状況を介した間接的な関連性を持っていた。また、主

婦(夫)において経済的状況やサポートネットワークによらず各世代とも低い SOC であるという直接の関連性がみられていた。その一方で、25~34歳の世代においては、非正規雇用のホワイトカラー職であることが低い SOC を規定しており、それは直接の関連性と現在の経済的状況を介する間接的な関連性の両者が見られていた。また正規雇用のブルーカラー職においても低い SOC が規定されており、この世代においては職業間で SOC スコアの格差が他の世代よりも若干広がった。また、世代を問わず現在の経済的状況が豊かであることが現在の良好な SOC に関連し、貧しいことが低い SOC に関連することが明らかとなった。

サポートネットワークに関しては、世代によらず、人間関係の相談相手の範囲が少ないほど低い SOC であるが、20~24歳の世代では仕事や勉強の相談相手の範囲と SOC とは関連が見られないが、それ以降の世代では範囲が狭いほど低い SOC となっていた。しかし、仕事を紹介してくれる相手の範囲と SOC とは大きくは関連が見られず、まとまったお金を貸してもらう範囲が広いほど SOC が高いという関連性がみられたのは35歳以上の群のみにとどまることが明らかとなった。

参考文献・引用文献

- Adler, N. E., Boyce, T., Chesney, M. A., et al, 1994, "Socioeconomic status and health: The challenge of the gradient" *American Psychologist*, **49**, 15-24.
- Agardh, E. E., Ahlbom, A., Andersson, T., et al, 2003, "Work stress and low sense of coherence is associated with type 2 diabetes in middle-aged Swedish women" *Diabetes Care*, **26**, 719-24.
- 艾斌, 星旦二, 2005, 『高齢者における主観的健康感の有用性に関する研究 日本と中国における研究を中心に』日本公衆衛生学雑誌, **52**, 841-852.
- Antonovsky, A., 1979, "Health, Stress, and Coping: New perspectives on mental and physical well-being" San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- , 1987, "Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well" San Francisco: Jossey-Bass Publishers. (=2001, 山崎喜比古・吉井清子監訳『ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂.)
- , 1993, "The structure and properties of the sense of coherence scale" *Social Science & Medicine*, **36**, 725-733.
- , 1996, "The salutogenic model as a theory to guide health promotion" *Health Promotion International*, **11**, 11-18.
- Benach, J., Benavides, F. G., Platt, S., et al, 2000, "The health-damaging potential of

- new types of flexible employment: a challenge for public health researchers”
American Journal of Public Health, **90**, 1316-1317.
- Desalvo, K. B., Bloser, N., Reynolds, K., et al, 2005, “Mortality prediction with a single general self-rated health question a meta-analysis” *Journal of General Internal Medicine*, **20**, 267-275.
- Erikson E. H, 1982, “The cycle completed: A review” New York: W. W. Norton & Company. (=2002, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳. 『ライフサイクル、その完結』みすず書房.)
- Eriksson, M., & Lindström, B, 2005, “Validity of Antonovsky’s sense of coherence scale: a systematic review” *Journal of Epidemiology and Community Health*, **59**, 460-466.
- , & Lindström, B, 2006, “Antonovsky’s sense of coherence scale and the relation with health: a systematic review” *Journal of Epidemiology and Community Health*, **60**, 376-381.
- Farran, C. J., Herth, K. A., & Popovich, J. M., 1995, “Hope and Hopelessness: Critical clinical constructs” Thousand Oaks: Sage Publications.
- Feldt, T., Kokko, K., Kinnunen, U., et al., 2005, “The role of family background, school success, and career orientation in the development of sense of coherence” *European Psychologist*, **10**, 298-308.
- Grøholt, E., Stigm, H., Nordhagen, R., et al., 2003, “Is parental sense of coherence associated with child health?” *European Journal of Public Health*, **13**, 195-201.
- 原ひろみ, 2006, 『公的セーフティネットについての分析 ; 日本人の働き方とセーフティネットに関する研究—予備的分析—』 JILPT 資料シリーズ, **14**, 98-123.
- 橋本英樹, 2006, 「所得分布と健康」川上憲人・小林廉毅・橋本英樹編『社会格差と健康 社会疫学からのアプローチ』東京大学出版会, pp37-60.
- Holmberg, S., Thelin, A., & Stiernström, E., 2004, “Relationship of sense of coherence to other psychosocial indices” *European Journal of Psychological Assessment*, **20**, 227-236.
- Höge, T., & Büssing, A., 2004, “The impact of sense of coherence and negative affectivity on the work stressor-strain relationship” *Journal of Occupational Health Psychology*, **9**, 195-205.
- Idler, E. L., & Benyamini, Y., 1997, “Self-Rated Health and Mortality: A Review of Twenty-Seven Community Studies” *Journal of Health and Social Behavior*, **38**, 21-37.
- Ing, J. D., & Reutter, L., 2003, “Socioeconomic status, sense of coherence and health in Canadian women” *Canadian Journal of Public Health*, **94**, 224-228.

- Jorgensen, R. S., Frankowsky, J. J., & Carey, M. P. , 1999, “Sense of Coherence, negative life events and appraisal of physical health among university students” *Personality and Individual Differences*, **27**, 1079-1089.
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』 有信堂.
- Kawachi, I., & Berkman, L., 2000, “Social cohesion, Social capital, and Health” . In L. Berkman & I. Kawachi (Eds.), *Social Epidemiology*. New York: Oxford University Press. pp. 174-190.
- Kickbush, I., 1996, “Tribute to Aaron Antonovsky-‘What creates health’” *Health Promotion International*, **11**, 5-6.
- 木村知香子, 山崎喜比古, 石川ひろの ほか, 2001, 『大学生の Sence of Coherence (首尾一貫感覚、SOC) とその関連要因の検討』 日本健康教育学会誌, **9**, 37-48.
- Kivimäki, M., Feldt, T., Vahtera, J., et al., 2000, “Sense of coherence and health: evidence from two crosslagged longitudinal samples” *Social Science & Medicine*, **50**, 583-597.
- , Elovainio, M., Vahtera, J., et al., 2002, “Sense of coherence as a mediator between hostility and health” Seven-year prospective study on female employees. *Journal of Psychosomatic Research*, **52**, 239-247.
- , Vahtera, J., Virtanen, M., et al., 2003, “Temporary employment and risk of overall and cause-specific mortality” *American Journal of Epidemiology*, **158**, 663-668.
- Kohn, M. L., & Schooler, C., 1978, “The Reciprocal effects of the substantive complexity of work and intellectual flexibility: A longitudinal assessment” *The American Journal of Sociology*, **84**, 24-52.
- 近藤克則, 2005, 『健康格差社会 何が心と健康を蝕むのか』 医学書院.
- Krantz, G., & Östergren, P., 2004, “Does it make sense in a coherent way? Determinants of sense of coherence in Swedish women 40 to 50 years of age” *International Journal of Behavioral Medicine*, **11**, 18-26.
- Larsson, G., & Kallenberg, K. O., 1996, “Sense of coherence, socioeconomic conditions and health. *European Journal of Public Health*, **6**, 175-180.
- Lundberg, O., 1997, “Childhood conditions, sense of coherence, social class and adult ill health: Exploring their theoretical and empirical relations” *Social Science & Medicine*, **44**, 821-831.
- Lustig, D. C., & Strauser, D. R., 2002, “The relationship between sense of coherence and career thoughts” *The Career Development Quarterly*, **51**, 2-11.

- Lutgendorf, S. K., Vitaliano, P. P., Tripp-Reimer, T., et al., 1999, "Sense of Coherence moderates the relationship between life stress and natural killer cell activity in healthy older adults" *Psychology and Aging*, **14**, 552-563
- 木村通治, 真鍋一史, 安永幸子ほか, 2002, 『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版.
- Marmot, M., Feeney, A., Shipley, M., et al., 1995, "Sickness absence as a measure of health status and functioning: from the UK Whitehall II study" *Journal of epidemiology and Community Health*, **49**, 124-130.
- McGrath, J. C., & Linley, P. A., 2006, "Post-traumatic growth in acquired brain injury: A preliminary small scale study" *Brain Injury*, **20**, 767-773.
- Nakamura, H., Ogawa, Y., Nagase, H., et al., 2001, "Natural killer cell activity and its related psychological factor, sense of coherence in male smokers" *Journal of Occupational Health*, **43**, 191-198.
- Nilsson, B., Holmgren, L., Stegmayr, B., et al., 2003, "Sense of coherence – stability over time and relation to health, disease, and psychosocial changes in a general population: A longitudinal study" *Scandinavian Journal of Public Health*, **31**, 297-304.
- 小田博志, 2000, 「サリュートジェネシス論の概観と展望」 河野友信・山岡昌之・石川俊男・一条智康編 『最新心身医学—21世紀に向けた心身医学の展開』三輪書店 pp141-146.
- Pallant, J. F., & Lae, L., 2002, "Sense of coherence, well-being, coping and personality factors: further evaluation of the sense of coherence scale" *Personality and Individual Differences*, **33**, 39-48.
- Petrie, K., & Brook, R., 1992, "Sense of coherence, self-esteem, depression and hopelessness as correlates of reattempting suicide" *British Journal of Clinical Psychology*, **31**, 293-300
- Poppius, E., Tenkanen, L., Kalimo, R., et al., 1999, "The sense of coherence, occupation and the risk of coronary heart disease in the Helsinki Heart Study" *Social Science & Medicine*, **49**, 109-120.
- , Tenkanen, L., Hakama, M., et al., 2003, "The sense of coherence, occupation and all-cause mortality in the Helsinki Heart Study" *European Journal of Epidemiology*, **18**, 389-393.
- , Virllunen, H., Hakama, M., et al., 2006, "The sense of coherence and incidence of cancer – role of follow-up time and age at baseline" *Journal of*

- Psychosocial Research*, **61**, 205-211.
- Richardson, C. G., & Ratner, P. A., 2005, "Sense of coherence as a moderator of the effects of stressful life events on health" *Journal of Epidemiology and Community Health*, **59**, 979-984.
- Sagy, S., & Antonovsky, H., 2000, "The development of the sense of coherence: a retrospective study of early life experience in the family" *Journal of Aging and Human Development*, **51**, 155-166.
- Siegrist, J., & Marmot, M., 2004, "Health inequalities and the psychosocial environment – two scientific challenges" *Social Science & Medicine*, **58**, 1463-1473.
- Smith, S., M., Breslin, F., C., & Beaton, D., E., 2003, "Questioning the stability of sense of coherence The impact of socio-economic status and working conditions in the Canadian population" *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, **38**, 475-484.
- Strauser, D. R., & Lustig, D. C., 2003, "The moderating effect of sense of coherence on work adjustment" *Journal of Employment Counseling*, **40**, 129-140.
- Strümpfer, D. J. W., & Vivers, M. R., 1998, "Antonovsky's Sense of Coherence scale related to negative and positive affectivity" *European Journal of Personality*, **12**, 457-480.
- , & Mlonzi, E. N., 2001, "Antonovsky's Sense of Coherence scale and job attitudes: Three studies" *South African Journal of Psychology*, **31**, 30-37.
- Suominen, S., Blomberg, H., Helenius, H., et al., 1999, "Sense of Coherence and Health-Does the association depend on resistance resources? A study of 3115 adults in Finland" *Psychology & Health*, **15**, 1-12.
- , Helenius, H., Blomberg, H., et al., 2001, "Sense of coherence as a predictor of subjective state of health. Result of 4 year of follow-up adults". *Journal of Psychosomatic Research*, **50**, 77-86.
- , Gould, R., Ahvenainen, J., et al., 2005, "Sense of coherence and disability pensions. A nationwide, register based prospective population study of 2196 adult Finns" *Journal of Personality and Community Health*, **59**, 455-459.
- Surtees, P., Wainwright, N., Luben, R., et al., 2003, "Sense of Coherence and mortality in men and women in the EPIC-Norfolk United Kingdom prospective cohort study" *American Journal of Epidemiology*, **158**, 1202-1209.
- , Wainwright, N. W. J., Luben, R., et al., 2006, "Mastery, sense of coherence, and mortality: Evidence of independent associations from the EPIC-Norfolk prospective cohort study" *Health Psychology*, **25**, 102-110.

- , Wainwright, N. W. J, Luben, R. L., et al., 2007, “Adaptation to social adversity is associated with stroke incidence: Evidence from the EPIC-Norfolk prospective cohort study” *Stroke*, **38**, 1447-1453.
- 高山智子, 浅野祐子, 山崎喜比古 ほか, 1999, 『ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚(Sense of Coherence: SOC)と精神健康に及ぼす影響』 日本公衆衛生雑誌, **46**, 965-976.
- 戸ヶ里泰典, 山崎喜比古, 佐々木智子ほか, 2003, 『大学生の身体的精神的及び心理社会的 well-being に対する Sense of Coherence の予測力の追跡的検討』 日本健康教育学会誌, **11**(sup.), 104-105.
- , 坂野純子, 山崎喜比古ほか, 2004, 『思春期前期における SOC の関連要因について』 日本健康教育学会誌, **12**(suppl.), 184-185.
- , 山崎喜比古, 2005, 『13 項目 5 件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討』 民族衛生, **71**, 168-182.
- , 山崎喜比古, 2006, 『ストレスコーピング方略との関連に見る健康生成力 SOC の特徴の検討』 日本公衆衛生雑誌, **53**(suppl.), 419.
- , 坂野純子, 山崎喜比古, 2006, 『児童・思春期の SOC と、その心理社会的学校・家庭環境との関連性の検討』 学校保健研究, **48**(suppl.), 138-139.
- , 坂野純子, 山崎喜比古, 2007a 『小学校高学年向け学校帰属感尺度日本語版の開発』 学校保健研究, **49**, 47-59.
- , 小手森麗華, 山崎喜比古ほか, 2007b, 『高校生の sense of coherence と家庭環境・学校環境との関連性の検討』 民族衛生, **73**(suppl.), 66-67.
- Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., et al., 2007, “Development of a short version of the sense of coherence scale for population survey” *Journal of Epidemiology and Community Health*, **61**, 921-922.
- Torsheim, T., Aaroe, L. E., & Wold, B., 2001, “Sense of coherence and school-related stress as predictors of subjective health complaints in early adolescence: interactive, indirect or direct relationships?” *Social Science & Medicine*, **53**, 603-614.
- Tsuno, Y. S., & Yamazaki, Y., 2007, “A comparative study of sense of coherence(SOC) and related psychosocial factors among urban versus rural residents in Japan.” *Personality and Individual Differences*, **43**, 449-461.
- 堤明純, 2006, 「職業階層と健康」川上憲人・小林廉毅・橋本英樹編『社会格差と健康 社会疫学からのアプローチ』 東京大学出版会 pp81-101.
- 八巻 (木村) 知香子, 2003, 「SOC (sense of coherence 首尾一貫感覚)」 薬害 HIV 感染被害者 (遺族) 生活実態調査委員会編 『薬害 HIV 感染被害者遺族調査の総合報告書

- 3年にわたる当事者参加型リサーチ』 pp138-141.
- 山崎喜比古, 1999, 『健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC』 *Quality Nursing*, **5**, 825-832.
- , 2003, 「ストレスの進行と防止の過程徹底分析」 日本人のストレス実態調査委員会編『データブック NHK 現代日本人のストレス』 日本放送協会出版 pp178-200.
- 吉井清子, 2006, 『ストレス対処能力 (SOC)』 近藤克則編『検証「健康格差社会」』 医学書院 pp43-52.
- Virtanen, M., Kivimäki, M., Joensuu, M., et al., 2005, “Temporary employment and health: a review” *International Journal of Epidemiology*, **34**, 610-622.
- Volanen, S., Lahelma, E., Silventoinen, K., et al., 2004, “Factors contributing to sense of coherence among men and women” *European Journal of Public Health*, **14**, 322-330.
- , Suominen, S., Lahelma, E., et al., 2006, “Sense of coherence and its determinants: A comparative study of the Finnish-speaking majority and the Swedish-speaking minority in Finland” *Scandinavian Journal of Public Health*, **34**, 515-525.
- Wilkinson, R. G., 1992, “Income distribution and life expectancy” *British Medical Journal*, **304**, 165-168.
- & Pickett, K. E., 2006, “Income inequality and population health: A review and explanation of the evidence” *Social Science & Medicine*, **62**, 1768-1784.
- , 2006, “Ourselves and others – for better or worse: social vulnerability and inequality” In M. Marmot & R. Wilkinson (Eds.), *Social determinants of health* 2nd ed. New York: Oxford university press. pp. 341-357.
- Wolff, A. C., & Ratner, P. A., 1999, “Stress, social support, and sense of coherence” *Western Journal of Nursing Research*, **21**, 182-197.

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにともない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に解明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査の3つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究 S：2006 年度～2010 年度

厚生労働科学研究費補助金
政策科学推進研究：2004 年度～2006 年度

奨学寄付金
株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）：2006 年～

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ

- No.1 山本耕資 標本調査における性別・年齢による層化の効果：100 万人シミュレーション（2007 年 4 月発行）
- No.2 石田浩 仕事・健康・希望：「働き方とライフスタイルの変化に関する調査（JLPS）2007」の結果から（2007 年 12 月発行）
三輪哲
山本耕資
大島真夫
- No.3 中澤渉 性別役割分業意識の日英比較と変動要因：British Household Panel Survey を用いて（2007 年 12 月発行）
- No.4 戸ヶ里泰典 大規模多目的一般住民調査向け東大健康社会学版 SOC3 項目スケール：(University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 scale: SOC3-UTHS)の開発（2008 年 1 月発行）
- No.5 戸ヶ里泰典 20～40 歳の成人男女における健康保持・ストレス対処能力 sense of coherence の形成・規定にかかわる思春期及び成人期の社会的要因に関する研究（2008 年 1 月発行）

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>